

信州大学留学生センター年報 第4号

2002年10月～2004年3月



信州大学留学生センター

目 次

巻頭の言葉

目次

留学生センター教職員と業務	1
・センター構成員	1
・センターの教育・研究・学内委員会等に係わる業務分担	1
日本語教育	3
・日本語研修コース	3
平成14年度後期	3
平成15年度前期	5
平成15年度後期	8
作文集	10
成果発表会	12
受講者名簿	
7～9期生	13
・日本語・日本事情	14
・日本語補講	
平成14年度	17
平成15年度	23
SUNS 中上級	35
・日韓共同理工学部留学生事業予備教育	37
相談・指導業務	39
活動記録	45
交流事業	48
外部評価の実施	51
資 料	55
・留学生数	55
国別外国人留学生受入れ数	56
外国人留学生受入れ数の推移	56
同上 年度別・国別推移	57
・交流協定締結大学一覧	58
大学間協定	58
学部間協定	59
・センター教員（非常勤も含む）業績一覧	60

留学生センター教職員と業務

○教育スタッフ（平成16年3月現在）

（専任）センター長・教授	村瀬さな子（精神医学・異文化間交流）
教授	高石 道明（教育行政）
助教授	上條 厚（日本語教育）
助教授	村田 明（日本語教育）
助教授	佐藤 友則（日本語教育・国際交流）
（非常勤）講師	
日本語研修コース	金子泰子、熊崎さとみ、合津美穂、下平菜穂 中村純子、山本もと子、鈴木にし紀、梶浦麻子
日韓共同理工系学部留学生コース	小柴善一郎、森 覚、川崎貴史、益永淳二
日本語補講	高石久美子、村田満見子、井出礼子、荻久保千秋、 高橋 亨、佐藤佳子

○事務担当（平成16年3月現在）

学生部留学生課

課長	木川 政夫
留学生係長	藤本 哲生
同係員	鍋島 真一
同事務補	藤井ゆり子
留学生センター係長	古平 克彦

○学内委員会及びセンター業務分担（平成15年度）

学内各種委員会

学内共同教育研究施設等管理委員会

村瀬さな子、高石道明、藤沢文人（15年7月まで）

留学生センター運営委員会

センター専任教員全員

自己点検評価委員会「国際連携・協力評価専門部会」

高石 道明

○出版・広報（平成15年度）

センター紀要	上條 厚
センター年報	高石 道明
センターニュース	高石 道明
パンフレット	高石 道明
相談ハンドブック	村瀬さな子
外国人留学生の手引き	上條 厚
ホームページ	佐藤 友則

○授業

日本語研修コース	佐藤 友則
同 国際理解専攻コース	村田 明

日本語・日本事情	上條 厚
日本語補講	上條 厚
SUNS 日本語補講	佐藤 友則
日韓共同理工系学部留学生予備教育	上條 厚

○交流・相談

留学生担当教員連絡会	村瀬さな子
相談業務	村瀬さな子
留学生送り出し相談	佐藤 友則
地域交流事業	佐藤 友則

○学事（行事）一覧

村田 明

○自己点検・評価

外部評価

村瀬さな子

高石 道明

高石 道明

○学長裁量経費申請

高石 道明

村瀬さな子

日 本 語 教 育

日本語研修コース

○平成14年後期 日本語研修コース

[期 間] 平成14年10月～15年3月

[学習者] 10名

ルーマニア	研究生	信州大学工学系研究科（理学）進学	女性
ブラジル	教員研修生	山梨大学教育学研究科進学	女性
インド	研究生	信州大学工学系研究科（理学）進学	男性
中国	研究生	信州大学工学系研究科（理学）進学	男性
中国	研究生	信州大学医学研究科進学	男性
中国	大学院生	信州大学医学研究科在籍	男性
中国	研究生	信州大学医学研究科進学	女性
モンゴル	研究生	信州大学工学系研究科（繊維）進学	女性
中国	研究生	信州大学工学系研究科（繊維）進学	女性
中国	研究生	信州大学医学研究科進学	男性

平成14年後期には、大使館推薦の留学生が2名、大学推薦の留学生が3名と、これまでの期よりも国費奨学金を受けている学習者が多かった。上記10名のうち、1名は前半だけの参加となり、修了はしなかった。

[コース（週予定）] 2クラス

Aクラス（初級学習者対象）6名

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	主教材①	主教材①	主教材①	主教材①	復習①
2	主教材②	主教材②	主教材②	主教材②	復習②
3	漢字	発音＋聴解	漢字	Project Work	読解
4	×	Tutorial	Tutorial	Project Work	Tutorial

1コマ＋2コマ 9：30～12：30（休憩は適宜1回または2回）

3コマ 13：30～15：00

4コマ 15：10～16：40

（主教材）

主教材として『みんなの日本語初級Ⅰ・Ⅱ』を使用した。ほぼ全ての学習者が文字から学習する「ゼロスターター」であったため、比較的ゆっくりと進めた。それでもコース半ば頃より、順調に習得して話せるようになった者と、いつまでも英語に頼って日本語での会話が不可能な者に二分された。この傾向はコース修了まで変わらず、流暢に日本語で会話ができるようになった者と、日本語でのコミュニケーションが不能な者が生まれた。

（Project Work）

平成13年後期から開始された Project Work は、この学期でも継続実施された。通常の教室での教科書を用いた活動を離れ、レベルの異なる学習者が一同に会して1つの活動を行うという学習形式である。

しかし、上述したように、この学期ではAクラス内に能力が異なる2グループが存在したことで、運営はこれまでの期よりも難しく、担当者は常にハンドアウトに英語訳も併記するなどの労が絶えなかった。また、この活動へのモチベーションが低い学習者も見られ、そのような学習者にどう対応するか問題となった。

以下にプロジェクトの実施内容をあげる。

10月17日	買い物とカタカナ・タスク
10月24日	松本街歩き 準備 (10/25 実施)
10月31日	日本人と話そう①準備
11月7日	日本人と話そう②発表
11月14日	伝統文化紹介のビデオ・好きなもの紹介①準備
11月21日	好きなもの紹介②発表
11月28日	日本の伝統文化体験(華道+茶道)
12月5日	おしゃべりパーティー①準備
12月12日	おしゃべりパーティー②準備 (12/13 実施)
1月9日	インタビュープロジェクト①準備
1月20日~23日	インタビュープロジェクト②準備
1月24日	インタビュープロジェクト③発表
1月31日	文集作成プロジェクト①準備
2月6日	文集作成プロジェクト②準備
2月18日~24日	修了発表①準備
2月25日	修了発表②

(漢字)

午前のクラスとは関係なく、学習者の漢字能力とニーズに応じてクラス分けを行い、『Basic Kanji Book vol. 1』を用いて指導した。

(発音+聴解)

発音担当の教師と聴解担当の教師に分かれ、Aクラスの最初の45分は発音を、残り45分は聴解を指導した。Bクラスでは、聴解を先に発音を後に指導した。発音では、自己モニターを用いた指導を行った。発音指導には『みんなの日本語』の会話文を用いた。会話文を録音してから、学習者自身が自分の発話を聞き、問題点があるか、どんな問題点かをチェックさせるという方法で行った。聴解は『楽しく聞こうI』などを用いた。

(日本事情)

朝日小学生新聞やビデオなどを用い、日本に関する知識を増やすこと、自由に日本語を使って話し合わせることを、聴解能力を養成することを目的として行われた。

(読解)

最初に『初級で読めるトピック25』で指導し、次に『読みへの挑戦』を用いて指導した。トピックにとりあげられた内容かを読むことからさらに話を広げて、日本事情的な話題にまでふみこんで授業を行った。

(復習)

主教材で指導した文法・文型の復習をしつつ、使えることを目的にした練習を行った。

(テスト)

2回の月例テスト+修了テストの形式で行った。月例テストでは、その1ヶ月分の文法テスト、漢字テスト、そして会話テスト(ロールプレイ形式)を行った。また、修了テストでは、全学習項目を対象にした文法、漢字、会話の3テストをした。

(Tutorial)

学習者1名に教師1名がついて、指導を行った。指導内容は、学習者と相談のうえで決定されたため、それぞれ異なる。最後の修了発表の準備などもTutorialで行うようにした。

Bクラス（初中級学習者対象）4名

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	主教材①	主教材①	主教材①	主教材①	復習①
2	主教材②	主教材②	主教材②	主教材②	復習②
3	作文	発音+聴解	漢字	Project Work	読解
4	×	×	×	Project Work	×

(主教材)

全て既習の学習者だったため、『新日本語の中級』を用いて指導した。

(作文)

『表現テーマ別 にほんご作文の方法』を用いて論文指導を行った。授業中は、話す練習のために、会話もしつつ論文の技術を指導し、宿題として書いて提出させるようにした。

(読解)

『留学生の日本語 読解編』を用いて指導した。

(漢字)

『Intermediate Kanji Book vol. 1』を用いて、訓読みを中心に指導した。

(テスト)

Aクラス同様、2回の月例テストと1回の修了テストを行った。

[コース (学期予定)]

10月初旬	学習者の受け入れ
10月8日～10日	オリエンテーション
10月11日	開講式
10月14日	授業開始
11月26日	11月 月例テスト
12月20日	12月 月例テスト
12月21日～1月5日	冬休み
2月17日	修了テスト
2月25日	修了発表会
3月1日～2日	研修旅行（伊豆へ）
3月11日	修了式

(評価)

学習者の最終評価は、このコースに関わった専任教官が判定会議を開いて行った。評価対象としたのは、各テスト結果と、通常の授業・生活面での日本語能力である。評価は、「通常のコミュニケーション能力」などの4項目それぞれにおいて、A～Dの四段階で行い、その判定結果は、コメントをつけて進学先の指導教官へ連絡した。

また、平成14年後期同様、それぞれの科目に成績をつけて成績証明書を発行した。科目は「文法・会話」「プロジェクト・ワーク」などで、担当教官（非常勤講師も含む）が100点満点で成績をつけた。

○平成15年前期 日本語研修コース

[期 間] 平成15年4月～15年9月

[学習者] 8名

ネ パ ー ル 研究生

山梨大学工学研究科進学

男性

ペラルーシ	研究生	信州大学工学系研究科(工学)進学	男性
ルーマニア	研究生	信州大学人文研究科進学	女性
中国	大学院生	信州大学医学研究科進学	女性
中国	大学院生	信州大学医学研究科進学	女性
中国	大学院生	信州大学医学研究科進学	女性
ドイツ	交換留学生	平成15年8月帰国	女性
フランス	短期留学生	平成15年6月帰国	女性

【コース(週予定)】 2クラス

Mクラス(初級学習者対象) 5名

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	主教材①	主教材①	主教材①	主教材①	復習①
2	主教材②	主教材②	主教材②	主教材②	復習②
3	漢字	発音+聴解	漢字	発音+聴解	Project Work
4	×	Tutorial	Tutorial	Tutorial	Project Work

1コマ+2コマ 9:30~12:30(休憩は適宜1回または2回)

3コマ 13:30~15:00

4コマ 15:10~16:40

(主教材)

『みんなの日本語初級I・II』を使用し、1日1課のペースで指導して、コース修了直前に全50課を終えた。

(Project Work)

平成13年度後期同様、週1回に固定してProject Workを行った。活動内容は以下の通りである。

4月18日	買い物とカタカナタスク+松本街歩き①
4月25日	松本街歩き②
5月9日	松本街歩きフィードバック+日本文化体験①書道
5月16日	日本文化体験②(琴+茶道)
5月23日	日本人と話そう①準備
5月30日	日本人と話そう②実施
6月6日	日本人と話そうフィードバック+蛍祭り旅行①準備(6/13実施)
6月13日	おしゃべりパーティー準備①
6月20日	おしゃべりパーティー準備② →27日に実施
7月4日	インタビュープロジェクト①準備
7月7日~10日	インタビュープロジェクト②準備
7月11日	インタビュープロジェクト③発表
7月18日	インタビューのフィードバック+暑中見舞い
7月25日	文集作成プロジェクト①
9月5日	文集作成プロジェクト②
9月9日~16日	修了発表準備
9月17日	修了発表

(発音+聴解)

火曜日は、平成14年度後期同様、発音と聴解を2人の教師が担当して45分ごとにクラス交代して実施していたが、Bクラスに関しては発音のニーズが低かったために内容を修正し、Aクラスは発音+聴解、Bクラスはビデオを用いての聴解および内容理解を実施した。

一方、木曜日は、日本語の音韻構造なども含めて理論的に発音指導を行った。

(漢字)

非漢字圏の学習者を対象に、『Basic Kanji Book vol. 1』を用いて漢字の指導を行った。

(復習)

主教材で指導した文法・文型の復習をしつつ、使えることを目的にした練習を行った。

(テスト)

3回の月例テストおよびコース修了時の修了テストを実施した。試験科目は、文法、漢字、会話の3つである。

(Tutorial)

学習者1名に教師1名がついて、学習者と相談のうえ、指導を行った。

Bクラス（上級学習者対象）4名+学部授業参加2名

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	主教材①	主教材①	主教材①	主教材①	主教材①
2	主教材②	主教材②	主教材②	主教材②	主教材②
3	作文	発音+聴解	漢字	読解	Project Work
4	×	×	×	×	Project Work

(主教材)

学習者のニーズに応じて曜日毎に内容を変えて指導した。多くの教科書を既習だと主張する学習者がいたため（習得はしていないのだが）、新たな教科書を探して対応した。

(発音+聴解)

当初は、前半45分が発音、後半45分が聴解という形式で指導していたが、学習者に発音へのニーズが見られなかったため、コース半ばで発音指導をやめ、ビデオを見て内容を聞き取れたか、その内容についてどのような意見を持っているか話す形式に修正した。

(作文)

『留学生の日本語 作文編』を用いて指導した。

(漢字)

漢字圏の学習者および漢字の既習者を対象に指導した。

(テスト)

Aクラス同様、3回の月例テストと1回の修了テストを行った。

[コース（学期予定）]

4月初旬	学習者の受け入れ
4月7日～9日	オリエンテーション
4月11日	開講式
4月14日	授業開始
5月29日	5月 月例テスト
6月23日	6月 月例テスト
7月31日	8月 月例テスト
8月1日～8月31日	夏休み
8月29日	研修旅行（上高地・乗鞍へ）
9月8日	修了テスト
9月17日	発表会
9月24日	修了式

(評価)

修了判定（ABCD評価）と別に、各授業における習得度・出席率・積極性などを勘案して成績をつ

け、学習者に成績証明書を配布した。

○平成15年後期 日本語研修コース

【期 間】 平成15年10月～16年3月

【学習者】 15名

ガ	ー	ナ	研究生	信州大学教育学研究科進学	女性
バ	ン	グ	研究生	信州大学教育学研究科進学	女性
バ	ン	グ	研究生	信州大学工学研究科(工学)進学	男性
韓		国	研究生	信州大学教育学研究科進学	女性
韓		国	研究生	信州大学工学部進学	女性
韓		国	研究生	信州大学工学部進学	男性
韓		国	研究生	信州大学工学部進学	男性
韓		国	研究生	信州大学農学部進学	男性
中		国	研究生	信州大学人文学研究科研究生継続	女性
中		国	研究生	信州大学人文学研究科研究生継続	女性
中		国	研究生	信州大学教育学研究科研究生継続	女性
中		国	大学院生	信州大学医学研究科所属	女性
中		国	研究生	信州大学医学研究科研究生継続	男性
中国	(チベット)		研究生	信州大学人文学研究科研究生継続	男性
ド	イ	ツ	交換留学生	平成16年3月帰国	男性

【コース(週予定)] 2クラス

Aクラス(初級学習者対象) 5名

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	主教材①	主教材①	主教材①	主教材①	復習①
2	主教材②	主教材②	主教材②	主教材②	復習②
3	漢字	教室外活動	漢字	発音+聴解	作文
4	Tutorial	教室外活動	Tutorial	Tutorial	×

1コマ+2コマ 9:30~12:30 (休憩は適宜1回または2回)

3コマ 13:30~15:00

4コマ 15:10~16:40

(主教材)

『みんなの日本語初級I・II』を使用し、1日1課のペースで指導した。習得にやや難があったため、50課修了を目指さず、48課まで丁寧に指導した。

(教室外活動)

この学期より、それまで使用していた「プロジェクトワーク」という授業名を、より実態に即した「教室外活動」に変更した。

10月21日	ネットで自己紹介①
10月28日	ネットで自己紹介②／松本街歩き 準備
11月4日	松本街歩き
11月11日	日本人と話そう 準備／日本文化体験 準備
11月18日	日本人と話そう
12月2日	日本文化体験 本当のお茶室訪問&体験
12月9日	日本文化体験まとめ①
12月16日	おしゃべりパーティー準備／文化体験まとめ②
12月19日	おしゃべりパーティー
1月6日	インタビュープロジェクト①準備／学校見学準備
1月13日	付属中学校見学&交流
1月19～22日	インタビュープロジェクト②
1月23日	インタビュープロジェクト③発表会
1月27日	松本紹介①
2月3日	松本紹介②／文集作成プロジェクト①
2月10日	松本紹介③／文集作成プロジェクト②
2月16日～23日	修了発表準備
2月24日	修了発表

(発音+聴解)

Bクラスではよりニーズの高い授業を行い、Aクラスのみ発音+聴解の授業を行った。

(漢字)

『Basic Kanji Book vol. 1』を用いて漢字の指導を行った。漢字圏の学習者もいたが、読みが不十分だったため、非漢字圏の学習者と共に学習していた。

(復習)

主教材で指導した文法・文型の復習を目的に指導した。

(テスト)

2回の月例テストおよびコース修了時の修了テストを実施した。月例テストの科目は、文法、漢字、会話の3つだが、修了テストではこの3つの他に読解と聴解のテストも行った。

(Tutorial)

学習者1名に教師1名がついて、45分ずつ学習者の個別指導にあたった。

Bクラス (中上級学習者対象) 10名

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
1	テーマ別①	テーマ別①	テーマ別①	文化中級①	文化中級①
2	テーマ別②	テーマ別②	テーマ別②	文化中級②	文化中級②
3	作文	教室外活動	読解	読解	作文
4	×	教室外活動	×	×	×

(主教材)

曜日毎に主教材を変えて指導した。月曜日から水曜日までは『テーマ別 中級から学ぶ日本語』を、木曜・金曜は『文化中級日本語』を用いた。

(作文)

『留学生の日本語 作文編』を用いて指導した。

(漢字)

『留学生の日本語 読解編』を用いて指導した。

(テスト)

Aクラス同様、3回の月例テストと1回の修了テストを行った。テスト科目も同様である。

[コース (学期予定)]

10月初旬	学習者の受け入れ
10月6日・7日	オリエンテーション
10月8日	かな指導
10月11日	開講式
10月14日	授業開始
11月26日	11月 月例テスト
12月19日	12月 月例テスト
12月20日～1月5日	冬休み
2月16日	修了テスト
2月24日	発表会
2月26日・27日	研修旅行(京都)
3月10日	修了式

(評価)

各授業における習得度・出席率・積極性を考慮して成績をつけ、学習者に成績証明書を郵送した。

日本語研修コース作文集(2003年度後期)

センターの日本語研修コースでは、每期ごとに、学生の自己紹介、日本文化に関するエッセイ、リサーチ・プロジェクトの発表などを、冊子にして発行している。これを「作文集」と呼んでいるが、ここでは平成15年度後期のものを紹介する。

○平成15年後期 日本語研修コース

日本語研究コースでは、每期、研修の成果を「作文集」の形で残している。ここでは、平成15年度後期のものを紹介する。



[先生方から一言]

日本語研修コース担当教員9名

韓国フィーバー.....村瀬さな子... 3
 2003年度後期の研修コースがおわって
佐藤友則... 4
 春一番.....村田 明... 5
 プロジェクト・ワーククラスのみなさんへ
金子泰子... 6
 プロジェクト・ワークを終えて.....下平菜穂... 7
 大変だった でも 楽しかった.....梶浦麻子... 8
 「外国語を学ぶ」ということ熊崎さとみ... 9
 贈ることば.....合津美穂...10
 こんきの学生さんへ.....中村純子...11

[自己紹介]

金香宣.....12
 閻喜.....13
 陳小娟1.....14
 ジョー・ニャーコ.....15
 バブル・イスラム.....16
 劉明凱.....17

はじめに.....陳小娟... 1

カニズカマルンナハル・チョービ……………18	コンピュータの活用……………金香宣…50
[日本の文化について]	大学生の趣味……………金恩敬…57
日本の伝統文化……………金香宣…19	日本の大学生の旅行についての調査……………閻喜…63
日本の食文化……………劉明凱…24	日本人の学生はどうやって学費を払っているか
私の趣味……………陳小娟…27	……………ジョー・ニャーコ…72
私の趣味……………ジョー・ニャーコ…28	日本の学生のアルバイト
私の趣味	……………カニズカマルンナハル・チョービ…77
……………カニズカマルンナハル・チョービ…29	日本人学生のスポーツに対するたいど
松本にいたときの私のけいけん	……………バブル・イスラム…83
……………ジョー・ニャーコ…31	日本の母親のテレビに対する考え方について
長野日帰り旅行……………バブル・イスラム…33	……………陳小娟…88
[リサーチ・プロジェクトの発表]	信大生冬のスポーツに対する考え……………李承勲…93
あなたの「生きがい」は何ですか? ……呉?…35	日本の学生の家事に対する考え方について
大学生の異性との付き合いについて	……………劉明凱…98
……………孫成鎬…41	おわりに ……劉明凱…105

はじめに 陳小娟

私たちは2003年10月から2004年2月まで信州大学で日本語を勉強しました。私たちはいろいろな国からきました。中国人やガーナ人やバングラデシュ人や韓国人がいます。みんな友達になりました。日本語がみんなの架け橋になりました。

研修コースにはクラスがふたつあります。Aクラス(5人)とBクラス(10人)です。Aクラスは初級で、Bクラスは中級です。留学生は全部で15人です。Aクラスの留学生たちは始め日本語が全然わかりませんでした。先生方が上手に教えてくださいました。経験が豊富で、多量の視聴覚教材を使ってくださったので、無味乾燥な日本語の学習に楽しみが充満しました。それで、短い5ヶ月間に、みんなの日本語だんだん上手になりました。なんとこんなすばらしい文集まで編集しました。私たちは、本当に幸せです。

この5ヶ月は日本語を勉強しただけでなく、私たちは松本駅を見物したり、リンゴ狩りをしたり、日本文化の茶道をしたり、おしゃべりパーティーをしたり、スキーをしたり、いろいろな発表会を挙行したり、最後には京都旅行をしたりしました。どれもとても楽しかったです。

先生方のご指導を得て、この文集ができました。これは私達の小さな挑戦です。この文集の日本語のレベルはまだ低いと思いますが、今後も努力して日本語の勉強を続けたいと思います。

最後に、お世話になった先生方に心から感謝申し上げます。ありがとうございました。

おわりに 劉明凱

去年の10月から、私達留学生14人は信州大学の日本語研修コースで勉強してきました。この半年、私達は先生方にご指導をいただきまして、一生懸命勉強してきました。私達はおしゃべりパーティーを開いたり、日本文化の茶道を体験したり、様々な発表会に参加したりしたので、私達の日本語は上達しました。日本の文化や習慣などを理解することができました。この半年、私達は豊かな生活を過ごしました。日本語研修コースと別れるのは名残りおいしいです。私達はこの素晴らしい日をいつまでも忘れません。

○日本語研修コース成果発表会

研修コースでは、各期の最後に学生の出身国のことや専門のことについて、日本語で紹介する発表会を開いている。教員の指導の下、学生が司会・進行する。以下に、2002年後期と2003年前期の発表テーマと発表者を掲載する。(形式が異なるが、学生の作成したプログラムをそのまま掲載した。)

2002年度後期

- 一、はじめの言葉 サラバナン (インド)
- 二、発表
 - 1、中国の春節について 宋立軍 (中国)
 - 2、中国の節句と私の仕事 盧永浩 (中国)
 - 3、再生医学と幹細胞 岳鳳鳴 (中国)
 - 4、中国の料理 胡 毅 (中国)
 - 5、専門 (応用化学) と故郷 (チェンナイ) サラバナン (インド)
 - 6、専門とモンゴルの国について トヤツェツェグ・チュルーン (モンゴル)
 - 7、ホースセラピーについて ルチアナ (ブラジル)
 - 8、私の故郷と専攻分野の紹介 張志勇 (中国)
 - 9、私の専門 シモーナ・ルプシャ (ルーマニア)
- 三、終りの挨拶 盧永浩 (中国)
- 四、終り

2003年度前期

- 一 はじめの挨拶：周博
 - 1、アレクサンダー・フェドラヴィチェス (ベラルーシ)
「未知の国：ベラルーシの紹介と私の専門、機械工学について」
 - 2、葛鳳霞 (中国)
「中国北方の町—大連の紹介と私の専門について」
 - 3、ドゥラル・カダ・ナンダ (ネパール)
「美しい国ネパールの紹介と私の専門、水文学について」
 - 4、魏玲格 (中国)
「北京の紹介と私の専門、放射線医学について」
 - 5、レナタ・マリア・ルス (ルーマニア)
「日本の神話と北欧の神話の比較について」
 - 6、周博 (中国)
「蜀の紹介と私の研究について」
- 一 おわりの挨拶：アレクサンダー・フェドラヴィチェス
- 司会者：ドゥラス・カダ・ナンダ
- 委員長：周博

○受講者名簿

第7期：平成14年後期 受講者名簿

10名

	名前	国籍	進学先	奨学金の種類	種別	クラス
1	ルプシャ・アンジェルータ・シモナ	ルーマニア	理	大使館推薦・国費	研究生	A
2	ホサ・ルチアナ・ラモス	ブラジル	山梨・教育	大使館推薦・国費	教員研修生	A
3	ゴビンダチュエティ・サラバナン	インド	理	大学推薦・国費	研究生	A
4	トヤツェツェグ・チュルーン	モンゴル	繊維	大学推薦・国費	研究生	A
5	岳 鳳鳴 (ユエ・ホウメイ)	中国	医	大学推薦・国費	研究生	A
6	胡 トウ (コ・トウ)	中国	医	私費	研究生	B
7	宋 立軍 (ソウ・リツグン)	中国	理	私費	研究生	B
8	張 志勇 (チョウ・シユウ)	中国	医	私費	大学院生	B
9	楊 キフン (ヤン・キフン)	中国	繊維	私費	研究生	B
10	ルー永浩 (ルー・ヨンハオ)	中国	医	私費	研究生	B

第8期：平成15年前期 受講者名簿

8名

	名前	国籍	進学先	奨学金の種類	種別	クラス
1	ドゥラル・カダ・ナンダ	ネパール	山梨・工	大使館推薦・国費	研究生	A
2	フェダラビチャス・アレクサンダー	ベラルーシ	工	大使館推薦・国費	研究生	A
3	ルース・レナタ・マリア	ルーマニア	人文	大使館推薦・国費	研究生	B
4	周 博 (シュウ・ハク)	中国	医	私費	研究生	B
5	葛 鳳霞 (カツ・ホウカ)	中国	医	私費	研究生	A
6	魏 玲格 (ギ・レイカク)	中国	医	私費	研究生	A
7	カティア・リップファート	ドイツ	人文	私費	交換留学生	B
8	エリエット	フランス	経済	私費	交換留学生	A

第9期：平成15年後期 受講者名簿

15名

	名前	国籍	進学先	奨学金の種類	種別	クラス
1	金 香宣 (キム・ヒャンスン)	韓国	教育	大使館推薦・国費	教員研修生	B
2	カニズ・カムラム・ナハル・チョービ	バングラデシュ	教育	大使館推薦・国費	研究生	A
3	イスラム・エムディ・パブル	バングラデシュ	工	大使館推薦・国費	研究生	A
4	ニャルコ・ジョセフィーヌ	ガーナ	教育	JICA 受入・国費	研究生	A
5	成 セイホ (ソン・セイホ)	韓国	農	日韓プログラム・国費	研究生	B
6	李 承フン (イ・スンフン)	韓国	工	日韓プログラム・国費	研究生	B
7	呉 ヒョック (オ・ヒョック)	韓国	工	日韓プログラム・国費	研究生	B
8	金 銀ギョン (キム・ウンギョン)	韓国	工	日韓プログラム・国費	研究生	B
9	閻 喜 (エン・キ)	中国	人文	私費	研究生	B
10	衛 俊ピン (ウェイ・ジュンピン)	中国	医	私費	大学院生	B
11	フロリアン・シュルツェ	ドイツ	人文	私費	交換留学生	B
12	周 亜南 (シュウ・アナン)	中国	医	私費	研究者	A
13	南拉加 (ナムラジャ)	チベット	人文	私費	研究生	B
14	劉 明凱 (リュウ・ミンカイ)	中国	教育	私費	研究生	B
15	陳 小娟 (チン・ショウケン)	中国	人文	私費	研究者	A

日本語・日本事情

学部共通教育科目のひとつとして開講されている「日本語・日本事情」については、平成14年度後期および15年度前・後期も、従来どおりに行われた。15年度の開設授業は次のとおり。

- 日本語（表現中心）Ⅰ（前期）Ⅱ（後期）それぞれ1単位
2コマ 佐藤友則担当、1コマ 上條厚担当
- 日本語（読解中心）Ⅰ（前期）Ⅱ（後期）それぞれ1単位、2コマ 上條厚担当
- 日本事情（社会と人間（基礎））前期・2単位 村田明担当
- 日本事情（社会と人間（応用））後期・2単位 村田明担当
- 日本事情（日本の文化）Ⅰ（前期）Ⅱ（後期）それぞれⅡ単位 村田明担当
- 日本事情（自然環境と人間）前期・2単位 上條厚ほか担当
- 日本事情（長野県の自然環境と人間）後期・2単位 上條厚ほか担当

日本語の授業はそれぞれ3コマまたは2コマ開講されているが、学生はそれぞれの授業について1コマのみを受講する。日本事情はすべて1コマずつの受講である。学生は、最大16単位まで取得でき、その単位を外国語科目および主題別科目に振り替えることが出来るが、その扱いは学部・学科により異なっている。

平成14年後期～平成15年前期 日本語（表現中心・佐藤分）

平成14年後期は、11月に行われる松本東ロータリークラブ主催のスピーチコンテストを利用して、スピーチ原稿の作成とスピーチの仕方を指導した。その後、クラス内スピーチコンテストを実施し、次の授業でその評価を行った。ロータリークラブのコンテスト参加は自主性に任せた。スピーチ指導終了後は論文指導に戻り、前期の論文学習の復習と、様々な練習を行った。また、数回だけだがプレゼンテーションの指導を行い、模擬発表をしたうえで、プレゼンテーションの注意点などを指導した。評価は、クラス内スピーチコンテストでの評価と宿題の提出率および出席率をもとに行った。

平成15年前期は、この数年をかけて熟成させてきた論文指導の自作教材を配布し、それをもとに指導を行った。原稿用紙の使い方・句読点の打ち方に始まり、論文で使っては行けない表現・論文特有の表現などを指導し、論文の構成を学習し、最終的に自由なテーマで2,000字以上の論文を提出させた。評価は、その最終論文と出席率、授業での理解度、宿題の提出率によって行った。

平成15年度前・後期 日本事情（シラバスから一部を紹介する。）

日本事情（社会と人間（基礎））

現代日本社会の様々な側面を、ひとつずつ話題を絞って考えて行く。

- ・日本社会概説 ・国際結婚 ・家事労働 ・夫婦別氏問題 ・死刑廃止問題
- ・ワープロ受難 ・正当防衛 ・企業のあり方 ・労働形態 ・労働時間
- ・21世紀の産業構造

日本事情（社会と人間（応用））

留学生のための日本事情授業として適切な話題を選択し、受講生にこれらをめぐる問題について意見をまとめさせる。

- ・交通事故を起こしたとき ・就職に向けて ・日本の給与制度 ・何のために働くのか ・転職、転勤、単身赴任
- ・円高、円安 ・日本の物価はなぜ高い ・都市問題 ・バブル崩壊、財政赤字
- ・公害、地球汚染 ・地方の時代

日本事情（日本の文化Ⅱ）

ことばも文化の表れである、というより、ことばがなければ文化は成立しない。日本文化を考える際には、日本語の特徴を知っておく必要があるという観点から、日本語に注意をはらいながら日本文化への認識を深めさせる。

- ・日本語の特徴、文節
- ・日本語と他言語の対照
- ・言語の特徴

日本事情（長野県の自然環境と人間）

長野県の環境と人間のかかわりを考えさせる。

- ・健康と生活環境
- ・人々の生活と日本の歴史
- ・衣・食の文化
- ・歴史・文化・生活の地理的背景
- ・風土と文学

日本事情（文化Ⅱ）平成14年度後期

日本事情（文化Ⅱ）は前期に日本文化Ⅰとして、日本の教育、日本の伝統文化、日本の高度技術紹介という副題の下に、日本文化についてのさまざまな話題を提供し、日本文化の特徴を考察させることにしている。後期は日本文化Ⅱとして、言葉も文化の表れである、というより、言葉がなければ文化は成立しない。日本文化を考える際に日本語の特徴を知っておく必要があるという観点から、日本語に注意を払いながら日本文化の授業をおこなっている。

今回の年報では、2002年度後期日本事情文化Ⅱの授業報告をおこなう。

授業の概要は、前半は、方言、定形表現、ことわざなど日本語独特の事例を紹介し、後半は、対照言語学の観点から日本語の特徴を講義する、である。

授業計画：

- 第1週 ガイダンス
- 第2週 日本文化Ⅱ概説
- 第3週 //
- 第4週 方言、定形表現、ことわざ、他
- 第5週 //
- 第6週 //
- 第7週 日本語の特徴
- 第8週 //
- 第9週 //
- 第10週 //
- 第11週 日本語と他言語の対照
- 第12週 //
- 第13週 //
- 第14週 //
- 第15週 テスト

方言授業では、実際にそれぞれの地方の人の話を聞かせるために、NHKが編集したお国ことば「デジタル映像ファイル」を利用した。

群馬： 「つぶれっちまうよ」

秋田県象潟町のお国ことば： 「のっきどこ」、「じろ」、「きしうり」、「かっぼでな」、「しょわしない」

静岡県天城湯ヶ島： 「ずねゃー」、「しうゃー」、「チッタ」、「モヤーショビキ」、「バグドジョウ」

東京のことば

下町ことば： 「知らねえけど」

山の手ことば： 「ございます」

熊本： 「わさもん」、「もっこす」、「しにかぶる」、「ごち」

定形表現では、「頭を垂れる」の読み方、「ボキャヒン」のような新表現、「けんもほろろ」、「しかと
する」、「しゃっちょこぼる」のような独特な表現の説明、その他、早口言葉、ことわざなどの紹介をし
た。この項目では、NHK プログラム『大樹林』を利用した。

4週にわたって日本語の特徴を講義した。特に、文節、連文節の考え方を説明した。

残りの4週を、日本語と他言語、特に中国語、韓国語、英語との文構造の比較について対照言語学の
観点からの講義と演習に費やした。

毎回の授業で課題を与えて、レポートとして提出させた。その課題の1つに留学生の母国語と日本語
を比較して意見を述べさせるというのがあって、以下にその作文の中からいくつかを掲載する。

日本語とシンハラ語

世界中でいろいろな言葉が使われていますが、そのそれぞれの言葉に日本語と似ているところがあり
ます。私の母国語シンハラ語と日本語は分を作る要素の順番が似ています。例えば、～から～まで～に
読んでもらうの場合、この語順が母国語と同じです。「私は本を読みます」この文で、主語が最初にき
て、動詞が最後にきているのもシンハラ語と同じです。

日本語とシンハラ語の異なる点は、「は」、「が」、「を」などの助詞です。シンハラ語では「は」、「が」、
「を」などの助詞を使っていません。また、日本語の「～せる」、「～させられる」のような文法形式も
シンハラ語では使われていません。

日本語と韓国語

私をはじめで日本語を勉強したとき、他の外国語より日本語は簡単だと思った。一番の理由は、主語、
述語などの単語の順序が同じだということです。英語よりやさしいと思いました。英語の場合は、前置
詞であるものが、日本語と韓国語では後置詞であるという共通点があります。

さらに、韓国語と日本語は敬語がたいへん発展しているという点も共通しています。しかしながら、
日本語と韓国語には微妙な差があって、その差が難しいです。日本語を学ぶ韓国人の学生は、漢語動詞
のスル形とサレル形の使い分けをよく間違えます。日本語の漢語動詞が自動詞だけに用いられる場合
には、韓国語でスル形であろうが、サレル形であろうが関係なく、全部スル形で表されます。また、他動
詞だけに用いられる場合にはスル形とサレル形が区別されて表されます。そして第3に自動詞と他動詞
の両方に用いられる場合は、通常スル形であるが、外部からの力を強調する場合は、サレル形で表しま
す。結局、日本語のスル形が韓国語では能動形または受動形にも使われて、韓国人学生が日本語を勉強
するときその差異によって、能動形と受動形の使い方をよく間違えます。

日本語と中国語

初めて日本語の教科書を見たとき、「日本語もたくさんの漢字を使っているんだ、しかも中国の漢字
の意味と同じみたいだ」と思いました。しかし勉強が深くなると、日本と中国の漢字の意味の違いに気
がつき、しっかり勉強しないと、日本語を正確に使えない、同じ漢字を使っているでもそう簡単ではない
と思いました。

「教室」、「豆腐」、「北京」、「五万」など発音はもちろん異なるが、字形を同じくする語を日中同形語
と言います。日中同形語には、「教室」、「豆腐」などリョウ互換で意味が同じものが多いが、一部意味
が異なるもの、まったく意味の異なるものも少なくないです。例えば日中異義の場合「ゆか」は「地
板」であり「床」とはいわない。中国の「床」っていうのは日本語の「ベッド」の意味です。「勉強」
は中国語で無理強いする、強いるという意味です。こういうものは注意が必要だと思います。

文法的には目的語のある場合とない場合とで、日本語と中国語は語順が異なります。中国語では、目
的語を動詞の後に置きます。日本語では目的語を動詞の前に置きます。英語と違って、日本語と中国語
は普通、時間と場所を主語のすぐ後に置きます。英語では文の一番後に置きます。 (村田 明)

日本語補講

平成14年度

◆松本地区

初級 前期 月 14:40~16:10 水 16:20~17:50 村田明担当

後期 火 16:20~17:50 金 16:20~17:50 上條厚担当

主教材:『みんなの日本語』I

ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』

『中日交流標準日本語』初級1

中級 前期 月 16:20~17:50 木 16:20~17:50 村田明担当

後期 火 13:00~14:30 金 13:00~14:30 村田満見子担当

主教材:ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』

『みんなの日本語』I II

◆長野地区

初級 前期・後期 火 10:00~12:00 金 10:00~12:00 青柳にし紀担当

主教材:『みんなの日本語』I

中級 前期・後期 火 13:00~15:00 金 13:00~15:00 青柳にし紀担当

主教材:『みんなの日本語』II

『新日本語の中級』

『中級から学ぶテーマ別 日本語』

『表現文型500』

◆伊那地区

初級 前期・後期 月 10:00~12:00 山本もと子担当 木 13:30~15:30 高石久美子担当

主教材:ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』NHK

副教材:『楽しく聞こう』I 凡人社

『みんなの日本語』I II スリーエーネットワーク

『クラス活動集101』スリーエーネットワーク

『続・クラス活動131』スリーエーネットワーク

『新文化初級日本語』I 凡人社

『スーパーキット』アルク

『スーパーキット』2 アルク

中級 前期・後期 月 13:00~15:00 山本もと子担当 金 11:00~13:00 高石久美子担当

主教材:ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』NHK

副教材:『初級 毎日の聞き取り50日』上下 凡人社

『毎日の聞き取り50日』上下 凡人社

『中級から学ぶテーマ別 日本語』研究社

『日本の地理と社会』凡人社

『みんなの日本語』I II スリーエーネットワーク

『クラス活動集101』スリーエーネットワーク

『続・クラス活動131』スリーエーネットワーク

『新文化初級日本語』II 凡人社

『スーパーキット』アルク

◆上田地区

初級 前期 火 10:00~12:00 金 10:00~12:00 村山啓子担当

後期 火 10:00~12:00 金 10:00~12:00 井出礼子担当

主教材: 『みんなの日本語』 I II

副教材: 『みんなの日本語 I 書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語 II 書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語初級 II 初級で読めるトピック25』

『絵でマスター 日本語の基本文型85』

『毎日の聞き取り50日』

『絵とタスクで学ぶ日本語』

ビデオ 『ヤンさんと日本の人々』

『クラス活動集101』

『クラス活動集131』

中級 前期 火 13:00~15:00 金 13:00~15:00 村山啓子担当

後期 火 14:00~16:00 金 14:00~16:00 今村一子担当

主教材: 『新日本語の中級』

『テーマ別中級』

副教材: 『Basic Kanji Book (基本漢字500)』 vol. 1

『中級—毎日の聞き取り』

ビデオ 『青春家族』

次に各地区担当者からの報告より掲載する。(すべての地区・期ではない。原文を改変した所あり)

平成14年度前期・後期 伊那地区 初級 (高石久美子・山本もと子)

期 間: 5月~2月

日 時: 山本(月) 10:00~12:00、高石(木) 13:30~15:30

学生数: 11名(変動あり)

主教材: ビデオ 『日本語 見る・聞く・話す』(ワークブックも使用) NHK 放送研修センター制作

副教材: 『楽しく聞こう』 I 文化外国語専門学校編、凡人社

『みんなの日本語』 I II スリーエーネットワーク、1998

『クラス活動集101』 スリーエーネットワーク、1994

『続・クラス活動131』 スリーエーネットワーク、1996

『新文化初級日本語』 I 文化外国語専門学校編 凡人社、2001

『スーパーキット』 アルク

『スーパーキット』 2 アルク

・授業内容:

ひらがな・カタカナの読み書き、挨拶、数字(時計・値段・助数詞)などの初級文法を学習し、日常生活に必要なコミュニケーションができるようにしている。

・感想:

初級クラスは学生の中途参加が頻繁にある(6月に2名、9月に3名、10月に3名、11月に2名追加)ので、新メンバーが入るたびに、復習を取り入れたたり、宿題としてひらがなプリントを渡したりしながら、柔軟な対応をしている。

授業内容は、まず、ひらがな・カタカナの読み書きの練習を平行しながら、主教材に沿って挨拶・数

字を学習していった。日常生活に必要な月日・時間や値段の言い方などは繰り返し練習し、助数詞のように複雑なものは一度に全部覚えさせるのではなく、「一冊」や「一本」のように基本的なものだけを学習し、その他は授業で使用されるたびに提示するようにした。補講の目的は「日常生活を円滑に行うための日本語講座」なので、文法よりも会話に重点をおいて、ロールプレイやゲームによる発話練習を数多く行っている。また、近くのスーパーへ一緒に行き、野菜や果物の名前を紹介する授業も行った。漢字圏以外の学生（タイ・バングラディッシュなど）が多いので、主教材はビデオ『見る・聞く・話す』とワークブックを使い、その課の文法事項に合ったゲームやタスクは『クラス活動集』から引用している。漢字は月日、曜日、地名などの生活漢字や「信州大学」などのような漢字の読みを少しずつ取り入れている。

聴解練習は『楽しく開こう』Iを使用している。始めはテープの速さに慣れず、何回か聞きなおしていたが、日本での生活に慣れてくるにつれて聞き取る力がついてきた。

学生は皆とても熱心で、分からないことがあるとすかさず質問し、ノートにせっせとメモしている。ほとんどの学生がゼロ学習者だが、数ヶ月経つと習った単語や構文を駆使して、日本語での会話を楽しむようになってきている。文法の苦手な学生が練習問題に詰まっていると、先にできた学生が教えてあげるなど学生の仲が良く、終始和やかな雰囲気である。また、学生の国籍がバラエティに富んでいるので、日本文化についてだけでなく、お互いの文化についても理解を深め、国際交流の場としても役立っている。

平成14年度前期・後期 伊那地区 中級 (高石久美子・山本もと子)

期 間：5月～2月

日 時：山本(月) 13:00～15:00、高石(木) 11:00～13:00

学生数：9名(変動あり)

主教材：ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』(ワークブックも使用) NHK 放送研修センター制作

副教材：『初級 毎日の聞き取り60日』上下 凡人社

『毎日の聞き取り60日』上下 凡人社

『中級から学ぶテーマ別 日本語』研究社、1999

『日本の地理と社会』凡人社、1996

『みんなの日本語』I II スリーエーネットワーク、1998

『クラス活動集101』スリーエーネットワーク、1994

『続・クラス活動131』スリーエーネットワーク、1996

『楽しく読もう』II

『新文化初級日本語』II 文化外国語専門学校 編、凡人社、2001

『スーパーキット』アルク

『スーパーキット』2 アルク

・授業内容：

主教材に沿って基本文型を学習しながら、ロールプレイやゲームによる発話練習を行い円滑なコミュニケーションができるようにする。

・感想：

中級クラスは昨年度初級クラスを受講した学生(中級レベル)と中級クラスが2回目の学生(中上級レベル)が入り混じっているので、かなりレベルの差がある。また、初級クラスと中級クラスの両方に出席する熱心な学生(初級レベル)もいるが、一応、今年度初めて中級クラスを受講する学生(中級レベル)のレベルに合わせた教材を用いている。

授業内容は、昨年度から引き続いて、ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』とそのワークブックを主教材にし、基本文型を学習した後に、その構文を使って『クラス活動集101』、『続・クラス活動131』などを参考にゲームやロールプレイを行って、定着を図っている。中級クラスはほとんど中国の学生なの

で文法問題は得意だが、会話が苦手なのでなるべく発話練習に時間をかけるようにしている。

また、学生の要望に答えて漢字学習を行っている。非漢字圏の学生も混じっているので、地名や「禁煙」などの生活漢字やキャンパス用語の漢字の意味と読みを学習している。聴解練習は主教材のビデオに加えて、毎回『初級 毎日の聞き取り50日』上下を行っているが、中上級レベルの学生には少し易しいので、そこで使用された単語や関連語句から話を発展させて語彙力を増やすようにしている。読解は『中級から学ぶテーマ別 日本語』を取り上げ、まとまった文の内容が理解できるようにしていたが、途中から漢字圏の学生が少なくなり少し難しくなったので、「日本の人口」や「梅雨、台風」などのような日本事情の読み物を取り上げた。作文は「研究室」のことや「教習所に通ったこと」など各々の日常の出来事を書き、書いた後、口頭発表している。書くことが得意な人と話すことが得意な人に分かれるが、お互いの生活が分かり、情報交換にもなっている。日本事情の学習を兼ねて、年賀状を書き、はがきの書き方を練習した。

平成14年度後期 松本地区 初級 (上條 厚)

期 間：10月～1月

受講者：登録 3人(全員中国、男2、女1)

修了 2人(男1、女1)

教 材：『中日交流標準日本語』初級1

10月初めの授業開始時は1名(男)のみであった。来日したばかりの人であり、10月に医学研究科に入学した私費の学生である。次いで10月15日に1名(男)増えたが、それは事情があり、12月末までの受講で終わった。(それまでは休むことなく出席した。本人の事情でこうなったが、こういう人を受け入れるべきかどうか疑問である)11月8日にまた1名(女)増えた。来日してすぐに受講希望したものであり、奨学金を得て1年間の予定で医学研究科に在籍予定の人である。2名は1月終わりまで受講した。2人とも真面目に出席し、一生懸命勉強した。

全員が中国人であったので、教材は『中日交流標準日本語』初級1を主教材として使った。同教材は全員が持っていた。(なお学部に入学者たちの中にも、同教材で学んだ人が大分いる)補講期間の終わりまでに、ちょうど同教材を終わらせることができた。主教材以外はてきぎ使った。

初級とは言え、全員がこれまでにある程度の学習歴があった。授業時間で扱っている課以上の学習項目も知っていることが多く、会話練習では自然にそうしたことも使われた。ただし同教材を最初から学習した。学生たちはもっと難しいことをしたいように思っていたようであるが、基礎からやり直した。

初級でもあり、読み書きよりは話すことに重点を置いた。みな積極的に日本語で表現しようという努力が見られた。また学内や街の中で聞いたり見たりする日本語についても、理解しようとしていた。ある程度のことは表現できるようになった。

ビデオで有名な映画、能・歌舞伎なども一部分見せた。そういう時にもいろいろ質問があり、日本のことをよく知ろうという姿勢がうかがわれた。

今回は終わりまで続けて学習したのは2名のみであった。年によりばらつきがあるが、それは仕方のないことである。今回は学習者が3名とも同程度の水準であったのでやりやすかった。しかもみな中国人であったことは教材決定の上で都合良かった。しかしいつもこのようにうまくいくわけではないことも確かである。

平成14年度後期 上田地区 初級 (井出 礼子)

期 間：10月～2月

修了証取得者：9名 中国：男性3、女性5 インドネシア：男性1

その他の学習者：2名 中国：女性1 韓国：女性1

主教材：『みんなの日本語』ⅠⅡ

副教材：『みんなの日本語Ⅰ書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語II書いて覚える文型練習帳』
『みんなの日本語初級II初級で読めるトピック25』
『絵でマスター 日本語の基本文型85』
『毎日の聞き取り50日』
『絵とタスクで学ぶ日本語』
ビデオ『ヤンさんと日本の人々』
『クラス活動集101』
『クラス活動集131』

平成14年度上田地区日本語補講初級の後期は、10月9日に開講しました。初日に受講申込者全員に対し、簡単なプレメントテストとインタビューで、日本語能力、学習歴と日本語学習（話すこと、聞くこと、書くこと、読むこと）の優先順位を聞きました。

後期から受講希望の中国人の6名（研究生）は『みんなの日本語初級』Iを終えた能力があり、6名がほぼ同レベルでした。日本人が話すのを聞くのが難しいということで、4名の優先順位の1位が聞くこと、2位に話すこと、2名が1位に話すこと、2に聞くこととなっており、読むこと、書くことは3、4位、同じく4、3位と同数となっていました。

インドネシア人1名はひらがな、カタカナがようやく書ける程度。（入門段階）自国で2ヶ月勉強したとのことでした。その他プレメントテストを受けた人がいましたが、前期からの学習者で、インタビューの結果、中級クラスを薦めました。

10月途中から、中国人1名（5年位前に日本で勉強した）は中級程度の能力がありましたが、初級クラスへの参加も希望し、さらに韓国人（『みんなの日本語初級』Iの20課まで勉強した）が加わり、初級8名、入門1名となりました。

初級は10月後半まで聴解教材を多く使い、聞いて、話すことを主に、日常生活に必要な語彙力のアップと、文法、文型の復習をしました。以後『みんなの日本語初級』IIに入りましたが、文法、文型の理解力が早いので、できるだけ話す練習、聴解を入れました。

入門は初級の学生がペアワークや書く練習をしている時、日常のあいさつから、『絵でマスター 日本語基本文型85』、『みんなの日本語初級I書いて覚える日本語文型練習帳』などを使い、徐々に『みんなの日本語初級』Iに移行していきました。インドネシアの学生には宿題を出すようにしましたが、大変熱心でよく勉強していました。12月から新しく中国人・男性（インドネシアの学生よりはレベルが上だが初級の学生よりはレベルが下）が入り、入門が2名となり、初級の学生より30分早く授業を始め、聴解も入れていきました。

また、初級にも中国人・女性（留学生センターで前期学習した）が入り、初級9名になりました。

いずれの学生も、学習意欲が高く、出席率が90%位で、好奇心も強く、日常の生活、日本人に接する中でいろいろな質問をしてきました。中国人の多いクラスでしたが、クラスの中で母語を話すことがなく、習ったことを日常生活の中に積極的に使おうと努力していることが見受けられました。

1月から日本語能力ゼロという中国人・女性が、日本語を聞くだけでもいいからとクラスに来ましたが、残念ながらその学生にはほとんど対応できませんでした。

担当者として、入門と初級の学習者に平等な時間配分を考えましたが、初級の人数が多く、初級に時間をとってしまいました。途中から参加する学習者への対応が大変だと思いました。

平成14年度後期 上田地区 中級 （今村 一子）

期 間：10月～2月

授業時間：1）10月終わりくらいまで：全員1つのクラスで 2：00～4：00

2）それ以降：初中級 1：30～2：30

中 級 2：30～4：00

・1）から2）へ変わった理由

後期から上田地区の担当となり、前期からの学生の様子などが分からない状態で始め、中級授業に参加した学生たちのレベルやニーズがつかみきれなかったため、途中でコースや授業見直しが必要となった。

午後の授業は「中級クラス」ということだったので、基礎文法は学習済みの学生が受講しているものと思って『新日本語の中級』を教科書として進めていたが、実際は色々なレベルやニーズを持った学生たちが集まっていた。(A)後期が始まる前の夏に来日したばかりの初級の学生、(B)初級後半までの文法は学習済みで日本語で日常会話がスムーズにできるようになりたいというニーズを持った学生、また、(C)中国出身の学生で、前期までに既に初級文法は終了しており、将来のために、日本語能力一級試験を受けることも射程にいれて勉強したいという学生、などである。『新日本語の中級』を使った授業は会話力の育成が中心となるので、(B)の学生にはレベルもニーズも大体合っているが、(A)と(C)の学生にはレベルが合わず、(C)の学生にいたってはニーズも満たしていないという状況であった。(A)の学生には午前中の初級クラスの授業のみ受けるように伝え、(A)と(C)の学生を初中級と中級のクラスに編成し直した。結果として、教師にとっても学生たちにとっても効率的な授業になって良かったと思っている。

受講者：初中級：2人（イラン出身の女性+バングラディッシュ出身の男性）

中 級：7人（全員中国出身の男性と女性）

教科書と教材：クラスを編成し直す前は『新日本語の中級』を全員で使用していたが、2クラスに分かれてからは、

初中級：『新日本語の中級』

『Basic Kanji Book（基本漢字500）』 vol. 1

中 級：『テーマ別中級』

『中級—毎日の聞き取り』（聞き取り教材）

ビデオ『青春家族』

・授業内容

初中級：二人とも日本の日常生活の中で使う日本語表現（会話）を勉強したいということなので『新日本語の中級』を教科書として授業を進めた。この教科書は全ての漢字にルビが付けられており、非漢字圏の学生である二人には使いやすかったようである。一時間の内、前半の45分はこの教科書を使っての会話や表現練習をし、残りの15分は上述の教科書を使っての漢字学習をした。二人とも日本語の勉強には漢字学習が必要であることを認識しており、勉強したいという要求が出されていた。この意味でも中国出身の学生（漢字圏）だけのクラスと分けたことは良かったと思う。

中 級：全員中国出身の学生で中級から上級にかけての学生たちであった。日本語能力一級試験に合格している学生もおり、これから受けたいという学生もいた。『テーマ別中級』の教科書を使って読解力を高め、中級レベルの表現を練習できるように進めた。漢字に関しては読み方に注意した。教科書で提示されたそれぞれの表現の練習では、全員に自分でその表現を使った文を積極的に作らせて発表させた。できるだけ授業中にたくさん話すようにさせ、間違いはなるべくその場で教師側から訂正を行った。

聞き取り能力を向上させる目的で、毎回『中級—毎日の聞き取り』を10分くらいで行った。またNHKの朝のドラマを基礎に編集されたビデオ教材『青春家族』を、希望者だけに授業が終わった後見させた。この教材は本来日本人視聴者向けに作られたものなので、前の週にその台本を学生たちに渡し内容を見て来るようにさせたが、それでも一部の学生を除き、かなり難しかったようである。ただ映像があり、ドラマの内容の大筋は分かるので毎回楽しみにしている学生もいた。

・感想と今後への希望

繊維学部でも最近かなり留学生が増えたとのこと。そして学生たちは、皆日本で生活し研究するために必死で日本語をマスターしようとしていることを強く感じた。補講期間がもう少し長いと良いと思う。今回（2002年度後期）は2月の一回目の授業で終わってしまい、何か学生たちには申し訳ないような気分だった。みな一様に不安そうで、「これから次の授業が始まるまで長いから困ります」言っていた。この休みの期間は、ボランティアグループの方たちと連携をして乗り切ることが組織的にできれば良い

のにも思ったが、どうなのだろうか。

また今後への希望として、最後の授業が終わる日を1ヶ月くらい前には知らせてもらえればと思った。
学生たちも気にして質問するので早めに伝えたいと思った。

学生たちは皆熱心で教師として本当に楽しく授業をさせてもらい、とても感謝している。

平成15年度

◆松本地区

初級 前期 月 16:20~17:50 木 16:20~17:50 村田明担当
後期 水 16:20~17:50 金 16:20~17:50 上條厚担当

主教材：ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』

『日本語』 I

『技術研修のための日本語』 初級 1

初中級 前期 火 13:00~14:30 金 13:00~14:30 村田明担当

後期 月 13:00~14:30 木 13:00~14:30 村田満見子担当

主教材：ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』

『聴解が弱いあなたへ』

『たのしく聞こう』

『みんなの日本語初級』 I II

『みんなの日本語初級 I 書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語初級 II 書いて覚える文型練習帳』

『日本語初中級』

『ことば絵じてん』

◆長野地区

初級

前期・後期 火 10:00~12:00 金 10:00~12:00 荻久保千秋担当

主教材：『みんなの日本語初級』 I II

『初級 毎日の聞き取り50日』 上下

『わくわく文法リスニング99』

『絵とタスクで学ぶ日本語』

『みんなの日本語初級 I 初級で読めるトピック25』

『クラス活動集101』

初中級

前期・後期 火 12:30~14:30 金 12:30~14:30 荻久保千秋担当

主教材：『どんな時どう使う日本語表現文型500』

『中級から学ぶテーマ別 日本語 ワークブック』

『中・上級者のための速読の日本語』

『毎日の聞き取り plus40』 上下

『日本語の発音教室』

『敬語の缶詰』

◆伊那地区

初級 前期 火 10:00~12:00 山本もと子担当 木 13:30~15:30 高石久美子担当

後期 火 10:00~12:00 佐藤佳子担当 木 11:00~13:00 高石久美子担当

主教材：ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』

『楽しく聞こう』 I
『毎日の聞き取り50日』 上下
『みんなの日本語初級』 I
『かな入門』

副教材：『みんなの日本語初級 I 翻訳・文法解説』（各国語）
『みんなの日本語初級 I 会話ビデオ』
『みんなの日本語初級 I 書いて覚える文型練習帳』
『絵でマスターにほんご基本文型85』
『にほんごくあいうえお』
『総合表記練習』
『ドリルとしてのゲーム教材50』
『クラス活動集101』
『かんじだいすき』（一）
『新文化初級日本語』 I
『やさしい日本語問題集』
『日本語の教え方 スーパーキット』 1・2
『写真パネルバンク』
『歌から学ぶ日本語』

初中級 前期 火 13:00～15:00 山本もと子担当 木11:00～13:00 高石久美子担当
後期 火 13:00～15:00 佐藤佳子担当 木13:30～15:30 高石久美子担当

主教材：『みんなの日本語初級』 I II
『毎日の聞き取り50日』 上下
副教材：『みんなの日本語初級 I 翻訳・文法解説』（各国語）
『みんなの日本語初級 I 会話ビデオ』
『みんなの日本語初級 I 書いて覚える文型練習帳』
『クラス活動集101』
『日本語ジャーナル』
『みんなの日本語初級 II 初級で読めるトピック25』
『歌から学ぶ日本語』
『ニュースからおぼえるカタカナ語350』
『新文化初級日本語』 II
『にほんごくあいうえお』
『総合表記練習』
『かんじだいすき』（一）
『日本語の教え方 スーパーキット』 1・2
『写真パネルバンク』
『漢字・語彙が弱いあなたへ』
『聴解が弱いあなたへ』
『日本語能力試験 試験問題と正解』

◆上田地区

初級 前期 水 10:00～12:00 金 10:00～12:00 井出礼子担当
後期 火 13:00～15:00 木 13:00～15:00 高橋亨担当

主教材：『みんなの日本語初級』 I
『みんなの日本語初級 I 翻訳・文法解説』（中国語版）

『みんなの日本語初級 I 翻訳・文法解説』（英語版）

副教材：『みんなの日本語 I 書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語 II 書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語初級 I 初級で読めるトピック25』

『絵でマスター 日本語の基本文型85』

『クラス活動集101』

『楽しく聞こう』 I

『初級 毎日の聞き取り50日』 上

『絵とタスクで学ぶ日本語』

初中級 前期 水 13:00~15:00 金 13:00~15:00 井出礼子担当

後期 火 14:00~16:00 木 14:00~16:00 井出礼子担当

主教材：『みんなの日本語初級』 II

『新日本語の中級』

副教材：『続・クラス活動集131』

『みんなの日本語初級 II 初級で読めるトピック25』

『みんなの日本語初級 II 書いて覚える文型練習帳』

『実践日本語シリーズ 擬声語・擬態語（初・中級）』

『実践日本語シリーズ 慣用句（初・中級）』

『実践日本語シリーズ 副詞（初・中級）』

『初級 毎日の聞き取り50日』 下

『中級 毎日の聞き取り50日』 上下

『楽しく聞こう』 I II

『絵とタスクで学ぶ日本語』

ビデオ『続ヤンさんと日本の人々』

『読売新聞』

『朝日新聞』

『日本語ジャーナル』

次に各地区担当者からの報告より掲載する。（原文を改変した所あり）

平成15年度前期 松本地区 初級・初中級（村田 明）

2003年度前期松本地区日本語補講は初級、初中級クラスを週2回ずつ、初級がゼロスタート学習者、初中級がゼロスタート以外の全受講希望者を対象に実施した。

初級

受講者：1人

教材：ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』

『日本語』 I

最初の2週間は、主にひらがなカタカナの読み・書き・聞き取りの練習に費やした。各種絵カード、地図、写真、等を使用して日常生活に必要な基本単語を紹介した。

構文練習とビデオ教材『日本語 見る・聞く・話す』の各章末の「わかりますか」を利用して、聞き取りや会話練習を行った。構文練習の教材は主に東京外国語大学付属日本語学校教材開発研究協議会編集の日本語 I を使ったが、それ以外にも各種日本語教材から適当な箇所を選んで使用した。

受講生は中国から理学部にきている研究者1人であった。小人数ということで、効率よく授業が実施できたと思う。週2回の授業で会話練習までしたにもかかわらず、かなり多くの構文練習をできたと思う。

初中級

受講者：3人

主教材：ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』

最初の数週間、英語で書かれた日本語文法の超極短要約版で、日本語文法の基本の説明をした。その際、単文を使っての練習をすることによって、動詞・形容詞の活用形の確認作業をさせるようにした。

構文練習とビデオを使っての聞き取り・会話練習の授業進行方法は基本的に初級と同じであるが、「日常会話に慣れる」という観点から、日常の話題を中心にできる限り多くの雑談をするようにした。

受講生は3人。

平成15年度後期 松本地区 初級 (上條 厚)

受講者：4人 中国男1、女1、バングラデシュ男1、女1

教材：『技術研修のための日本語』初級1

時間帯は後半になってから、受講者の希望により16:15~17:45とした。全員に対する授業終了後、補足が必要な人のために若干の補足を行った。

10月初めの授業開始時は中国男1を除く3名であった。後に中国男1が加わった。中途からの受講希望者は、他に中国2、韓国1、バングラデシュ1があったが、受講を申し込んだ時期およびその時点での日本語の水準により、その人たちは受け入れなかった。受講者の4人は休むことがほとんどなく、授業に出席した。

授業開始時に、日本語の水準が一番高かったのはバングラデシュ男であった。バングラデシュ女は来日後ある程度の期間の滞在歴があっただが、生活の中で聞き、身に付けた日本語が少しできるという程度であった。中国女は来日直後であった。日本語の教科書がある程度自分で学習済みであったが、会話は全くの初歩であった。中国男は中途から加わったわけであるが、来日直後、受講を希望した。その時点で、日本語の教科書を相当程度(『中日交流標準日本語』初級1を3分の2)自分で学習済みということであったが、会話はほとんどできなかった。その後大分進歩した。

授業は時間の多くの部分をTPR(TotalPhysicalResponse)の方法で行った。主教材とした教科書を踏まえながらも、学習した内容は教科書にあることばかりではない。教科書は7課まで終了した。皆、和気藹々で楽しく授業を進めることができた。分からないことをよく覚え、日本語で表現しようという学習態度の人ばかりであり、会話の能力を高めることができた。普段の学習・生活の中で接する日本語など、学生が疑問に思っていることについて質問することも多く、特にバングラデシュ男はよく質問した。

文字については、初期の段階でひらがな・カタカナを一通り指導し、その後も折に触れ書く練習をしたが、徹底して覚えさせるというほどにはしなかった。それよりも会話練習を重視した。バングラデシュの2人については、特にカタカナは、まだ定着したとは言えない。字形はいいかげんなままである。漢字は特別に指導はせず、よく使う漢字に適宜注意させた程度である。

教科書に基づき、読むことも行った。中国の2人はよく読むことができる。バングラデシュの2人は読むのが苦手である。文字の指導と文を読むことの指導、これを短い時間の中でどうすべきかは、検討すべき課題と言えよう。

『技術研修のための日本語』を主教材としたのは、バングラデシュ人・中国人、どちらも使え、かつ研修コースで使用しないものとするためであった。使用する状況にもよるが、この教科書は、今回あまり使いやすくなかった。

平成15年度後期 松本地区 初中級 (村田満見子)

受講者：7人。最後まで続けたのは4人。内訳は理学部・医学部の大学院生5人、訪問研究者2人。

医、理学部の学生、研究者は専門の研究においては英語が中心なので、日常生活で使う日本語を学習

したいというニーズがあった。そのため、聞く・話す練習と語彙の増加の学習に重点を置いた。

教材：『聴解が弱いあなたへ』

『たのしく聞こう』

『みんなの日本語初級』 I II

『みんなの日本語初級 I 書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語初級 II 書いて覚える文型練習帳』

『日本語初中級』

『ことば絵じてん』

* 文法事項

①て形のバリエーション

②可能動詞

③自動詞、他動詞

④条件、仮定形（と、ば、たら）などが中心であった。

* 授業のながれ

まず、カセット教材を使った聴解練習。ディクテーション、イラストを用いて関連語句の導入。中国人学生にとって、漢字を見れば意味の分かる言葉も音だけではわからないものが多かった。

文法学習はテキストを使って理解、応用し、必要に応じて口頭作文などを行った。なるべく受講生に発話してもらう時間をとるように、クイズ形式の練習をした。「ことば絵じてん」はもともと日本人の子供むけの絵辞典で、いろいろな項目のコピーの切り抜きを名刺大の画用紙に貼り付けて、一人一枚配る。カードをもらった学生は他の学生にその言葉を当てさせるべく、日本語で説明する。例えば、「砂糖」なら、甘いです。白いです。お菓子に使います。など、持てるかぎりの語彙と文型を使って皆にわかってもらおう。皆でわいわいと楽しくできた。また、12月末に受講生5人とで本郷小学校を訪問し、餃子を作って先生や父兄、児童と交流したのも良い思い出になった。

平成15年度 長野地区（荻久保千秋）

受講者：前期：初級11人、中級9人。後期（後期は初級をIとIIに分けて行った）：初級I 8人、初級II 6人、中級9人。

教材：初級 『みんなの日本語初級』 I II

『初級 毎日の聞き取り50日』 上下

『わくわく文法リスニング99』

『絵とタスクで学ぶ日本語』

『みんなの日本語初級 I 初級で読めるトピック25』

『クラス活動集101』

初中級 『どんな時どう使う日本語表現文型500』

『中級から学ぶテーマ別 日本語 ワークブック』

『中・上級者のための速読の日本語』

『毎日の聞き取り plus40』 上下

『日本語の発音教室』 くろしお出版

『敬語の缶詰』 旺文社

○授業内容

<初級 I>

ひらがな・カタカナを知っている程度からの学生が中心で、文型導入後は、習った文型で自分の事が話せるようになることを目的に授業を進めた。その日習った文型の短い聴解練習をやり、次回には復習を兼ねて長めの聴解練習を行うというやり方で、クラスの中では、会話と聴解練習にあて、文法問題や短い作文などは宿題とした。漢字練習の時間がなかなかとれず、フラッシュカードで、読み方のみの練

習になった。

<初級II>

基本的には、初級Iと同様だが、後期に作ったこのクラスは実質1時間しか授業時間がとれなかったため、テキストはなかなか進めなかった。

<初中級>

一日の授業は文型練習40分、聴解練習30分、読解練習30分、会話練習20分という配分で、このバランスは学生には満足できたようだ。会話練習が少なめであるが、滞りが長く学生の会話力が高かったため、日常会話よりも敬語などを入れた。その他、読解や聴解練習の中でも自分の意見などを発表したため、学生が話す時間は多かった。ただ、音読をさせるとアクセントやイントネーションがあまりにも悪かったので、発音にも意識をさせるよう練習した。

○レベル

<初級>

今年度は開幕当初から研究者の受講が多く、年代の幅が広がった。それが授業にも反映し、会話練習などバラエティーに富み楽しめたが、一方で、なかなか覚えられない人に答えを言ってしまう若い学生もいて難しい面もあった。

後期にひらがなもおぼつかないという2人を含め新生が6人入ったため、初級のクラスを30分繰り上げて始め、2クラスに分けて行った。前期と後期のやり方を変えなければならなかった。

<初中級>

滞日1～5年というバラバラなレベルながらも、基礎力が安定していたため、混乱はなく進められたので、レベル差は感じなかった。

○感想

<初級>

語学学習においては理想とされる8～10人というクラスで、年間通して授業が行われたが、クラスの雰囲気はとてよく、学生も熱心に取り組んでいた。学生の生活環境がそのまま日本語の習得にも影響するのか、日本語を話す機会を作る学生ほどやはり上達が早く、クラス以外では英語で済ませている人は、結局簡単な会話もままならない様子だった。日本語を身につけようという意欲の差かもしれないが、研究者にはこのパターンが多かった。一方、学生は入学試験を控えていたり、アルバイト先で耳にしたため、研究室の人たちとコミュニケーションがとりたいという気持ちが強く、積極的に質問をし、また吸収していった。

<初中級>

初級を終えた来日1年の学生と就職活動中の来日3～5年の学生など、中級と呼ぶにはあまりにも差があったが、レベル的にはさほど感じず授業ができた。学生の会話力からすれば、補講など必要ないと思われたが、学生はとにかく日本語を勉強したいと言ってやってきた。初級のクラス編成上、この初中級は無くしたほうが良かったのかもしれないが、自分達も初級クラスからやりなおすとまで懇願され、結局クラスを残したが、今後の課題である。

専門書が日本語で読めるようになりたい、研究発表を日本語でしたい、レポートを日本語で書きたい、研究室の日本人ともっと仲良くなりたい、日本で就職するためにも能力試験1級に合格したい、日本語の新聞や小説が読めるようになりたい・・・ これらが学生たちから出た中級・上級クラスを作ってほしいという希望だった。

○反省

1. 年間の授業時間が分かっているながら、きちんと年間計画を立てて臨まなかったために、初級については、1年学んだにもかかわらずテキストを終わらせることができなかった。後期に新生が大勢来た場合、4月からの学生とは当然同じクラスでは不可能で、後期から始める初級Iと継続クラス、初中級の3つが最低でも必要で、それに応じた計画も考えておかなければならぬのだと分かった。
2. 会話や聴解をメインに初級はやってきたが、初中級クラスの学生の要望を聞くと、初級を終えてか

ら望むことが多く、書く力や文法力、読解力、漢字など、やはりバランスよく初級からきちんとやらなければならないのではないかと感じた。

3. 最後の日に日本語補講クラスの感想を学生に聞くと、「面白い」「楽しい」が圧倒的だったが学生の日本語力をみると、もっと伸ばせたのではないかと反省した。楽しい雰囲気のまま終わってしまったようで心残りである。ただ、来日4年で卒業する学生が「研究室でも、アルバイト先でも、どこへ行っても、何年日本にいても、不安や緊張でストレスがある。この気持ちをどこへぶつけなければいいのか悩んでいた。今年初めて補講に出たが、ここへ来たら嫌なことが忘れられて明るい気持ちになれた」と言った。この言葉を聞き、補講クラスが学生にとってたんに日本語を学ぶ場所だけではなく、留学生たちの情報交換や、オアシス的な要素を含んでいることを知り、責任の重さをあらためて感じた。学生には日本語以外でも様々なことを聞かれたり、相談もあるがうまくこたえられず申し訳なく思う。色々な意味で自分も学ぶ事が多い1年だった。

平成15年度前期 伊那地区 初級・初中級 (高石久美子・山本もと子)

初級

受講者：バングラデシュ6人、タイ2人、中国1人、ドイツ1人、合計10人(途中帰国した人も含む)

主教材：ビデオ『日本語 見る・聞く・話す』(NHK)

『楽しく聞こう』I (凡人社)

『毎日の聞き取り50日』上下 (凡人社)

副教材：『みんなの日本語初級』I (スリーエーネットワーク)

『みんなの日本語初級I書いて覚える文型練習帳』(スリーエーネットワーク)

『絵でマスターにほんご基本文型85』(凡人社)

『にほんごくあいうえお』(凡人社)

『総合表記練習』(専門教育出版)

『ドリルとしてのゲーム教材50』(アルク)

『クラス活動集101』(スリーエーネットワーク)

『かんじ だいすき』(一) (国際日本語普及協会)

『新文化初級日本語』I (凡人社)

『やさしい日本語問題集』(国際日本語普及協会)

- ① ビデオ『見る・聞く・話す』を継続して見せた。先ず場面、状況を理解させてからワークブックで文型・語彙を確認していった。その後『クラス活動集』や『ゲーム教材』を使って定着をはかるようにした。
- ② 聴解は『楽しく聞こう』Iや『毎日の聞き取り』を使った。値段、時刻の言い方などは日常生活にすぐに役に立つものが多かったので、熱心に取り組んだ。
- ③ 学習者のほとんどはゼロスタートだったのでひらがな、カタカナを平行して入れていった。

初中級

受講者：中国4人、カンボジア1人、フィンランド1人、インドネシア1人、合計7人。

主教材：『みんなの日本語初級』II (スリーエーネットワーク)

『毎日の聞き取り50日』上下 (凡人社)

副教材：『みんなの日本語初級I書いて覚える文型練習帳』(スリーエーネットワーク)

『クラス活動101』(スリーエーネットワーク)

『日本語ジャーナル』(アルク)

『みんなの日本語初級II初級で読めるトピック25』、(スリーエーネットワーク)

『歌から学ぶ日本語』(アルク)

『ニュースからおぼえるカタカナ語』(アルク)

『新文化初級日本語』II (凡人社)

- ① 初中級は『みんなの日本語初級』II、『毎日の聞き取り』を主教材に使う基本文型を学習した後、ゲームやロールプレイを行った。
- ② 初中級になると、かなり話せるようになってきた。クラスでは身近な事を話題にしてできるだけ会話の時間を多く持った。例えば留学生センター主催の見学旅行のことや、演習林などへ調査に入ったことなど。お互いの研究など理解でき、興味深く聞いていた。
- ③ 今期は歌を多く取り上げた。『毎日の聞き取り』に歌が出てきたことがきっかけで、「日本語を覚えるために歌を習いたい」という希望が学生から出た。授業の最後に歌詞の意味を説明して「故郷」「幸せなら手をたたこう」「バラが咲いた」「上を向いて歩こう」「翼を下さい」「北国の春」などの歌を歌った。歌は初級でも取り入れたが、喜んで歌っていた。
- ④ 漢字は交通標識、病院内の漢字などの生活漢字やキャンパス用語の読みと意味を学習した。

全体として

- ① ゼミや調査などの専門の授業が優先されるため、その場合は日本語クラスは欠席になる。出席者は行って顔を見るまでわからなく、準備していった教材も使えないということもあった。しかし単位を取るためや出席日数のためでなく、本当に日本語を学習したいという意欲のある学生だったので、楽しくやりがいがあった。
- ② 夏休み中も交流室に集まって自分達で学習したようだ。日本語クラスの学生はみんな仲が良く、日本語以外にも一緒にバドミントンなどをして交流を深めていた。
- ③ 少し進んだところにゼロスタートの学生が入って来て、どこの焦点を当てたらいいのか困ったこともあった。しかし学生は協力的であったので助かった。

平成15年度後期 伊那地区 初級・初中級 (高石久美子・佐藤佳子)

初級

受講者：バングラデシュ5人、モンゴル1人、中国2人、タイ1人、合計9人。

主教材：『みんなの日本語初級』I (スリーエーネットワーク)

『かな入門』(凡人社)

- 副教材：a. 『みんなの日本語初級 I 翻訳・文法解説』(各国語) (スリーエーネットワーク)
b. 『みんなの日本語初級 I 会話ビデオ』(スリーエーネットワーク)
c. 『みんなの日本語初級 I 書いて覚える文型練習帳』(スリーエーネットワーク)
d. 『クラス活動集101』(スリーエーネットワーク)
e. 『にほんごくあいうえお』(凡人社)
f. 『総合表記練習』(専門教育出版社)
g. 『かんじだいすき』(一) (国際日本語普及協会)
h. 『日本語の教え方 スーパーキット』1・2 (スリーエーネットワーク)
i. 『写真パネルバンク』(国際交流基金)
j. 『歌から学ぶ日本語』(アルク)

- ① 『みんなの日本語』を使って順に進めていった。佐藤が導入したものを高石が復習し、運用力をつけるようにもっていった。お互い補い合うことができ、1人の教師が担当するよりも良かったと思う。
- ② ひらがな・カタカナを学習しながら、同時に学生たちに語彙力をつけるよう努めた。
- ③ 会話は上達しても文字はなかなか覚えられない学生もいた。
- ④ 「北国の春」など歌の学習をし、初中級の学生と一緒に農学部の留学生送別会の時に歌った。ゼミでカラオケに行った学生からは「日本語で歌えて教官にほめられた」との声があった。
- ⑤ 同時に出発しても、回数を重ねるごとにだんだんと差が出てきたが、先に進んだ学生は遅れている学生がいても嫌がらず、教えあって良い雰囲気であった。遅れている学生もひるむことなく、休まず

授業に出てきた。また、進んだ学生は初中級のクラスにも出席したので足踏み状態は解消できた。

初中級

受講者：バングラデシュ1人、ドイツ1人、中国2人、フィンランド1人、モンゴル1人、インドネシア1人、合計7人。

主教材：『みんなの日本語初級』I II（スリーエーネットワーク）

副教材 *上記、初級で使用した副教材a～jは、初中級でも使用。

k. 『みんなの日本語初級II初級で読めるトピック25』（スリーエーネットワーク）

l. 『漢字・語彙が弱いあなたへ』（凡人社）

m. 『毎日の聞き取り50日』上（凡人社）

n. 『聴解が弱いあなたへ』（凡人社）

o. 『ニュースからおぼえるカタカナ語350』（アルク）

p. 『日本語能力試験 試験問題と正解』（凡人社）

q. 『日本語ジャーナル』（アルク）

- ① 『みんなの日本語』で学習した後、『クラス活動集101』で定着をはかった。文法項目を理解した後は、それを実際の場面で使用できるよう留意した。
- ② 初中級のクラスになると、かなり話せるようになった。質問も多く積極的。クラスでは出来るだけたくさん発話してもらうようにした。1週間の間に身近に経験したこと、困ったことを話してもらった。宅急便の不在連絡票が入っていたがどうしていいかわからなかったとか、もっと安い下宿がないかなど情報交換の場にもなった。
- ③ 聴解は『聴解が弱いあなたへ』を使ったが、「ごみ出し」や「クリーニング」など生活に密着したものが多く役に立ったと思う。
- ④ 『漢字・語彙が弱いあなたへ』は復習としては適しているが、導入としては扱いにくかった。次回は主教材の『みんなの日本語』に沿って漢字・語彙をやっていきたいと思う。
- ⑤ メンバーの1人が日本語能力試験2級を受験した。それに刺激され、自分の日本語力を知りたいというので、過去の問題を数回やった。聴解は良かったが、文法は正答率が低くこちらの参考にもなった。

全体として

- ① 前・後期各17回ということで、後期の授業は1月末で終わった。新学期の日本語のスタートは4月下旬。農学部の場合、帰国や旅行をする学生は少なく、授業期間外でも、熱心な学生たちは自主的に集まって日本語の勉強をしている。出来ればもう少し補講の回数を増やしていただきたい。
- ② 留学生に対する掲示物（奨学金の案内・補講の日程変更など）の日本語が難解で、学生が理解できていないことがある。可能であれば英語併記を、それが無理ならば、簡単な日本語にふりがなを振るといったことが必要だと思われる。

平成15年度前期 上田地区 （井出礼子）

初級

受講者：9人。中国7人、バングラデシュ1人、インドネシア1人。

主教材：『みんなの日本語初級』I

副教材：『みんなの日本語初級I書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語初級II書いて覚える文型練習帳』

『みんなの日本語初級I初級で読めるトピック25』

『絵でマスター日本語の基本文型85』

『クラス活動集101』

聴解教材：『楽しく聞こう』

『初級 毎日の聞き取り50日』上

『絵とタスクで学ぶにほんご』

開講当初は昨年11月に来日し、15年度の後期を受講した特別研究生（中国人・男性）とゼロ学習者の特別研究生（中国人・女性）の2名で始まり、この2名が出席率90%以上であった。中国人同士なので後期から非常に熱心に学習していた男性は女性の学習をよく助けていた。この男性特別研究者はかなり時間に余裕があり、このコースはレベルが低いのを承知で受講していた。時々はそのため別の教材を用意した。女性は日本語の音がなかなか入らず発音に苦労し、時間がかかったが、文法の説明は英語と比較しながら飲み込みが速くよくノートを取り、学習意欲に溢れていた。

5月7日よりバングラデッシュ人（女性）が受講するようになった。彼女は来日年数も長く、子どもの保育園関係の交流、ボランティア学習会等への参加から耳から入ってくる語彙も多く、会話もなめらかだが、読むとなるとひらがなも完璧でなく、カタカナもやさしい漢字も読めず、書いて覚えようとする意欲は感じられなかった。

また、6月から研究者（中国人・男性）が受講、他大学に滞在中も英語に頼ってしまって日本語の学習はしていなかった。7月からは中国人（女性）で、ゼロに近い学習者が入り、9月には研究者（中国人・男性）がはいつてきた。インドネシア人の学生は3回参加したのみ、中国人学生2名は登録しただけであった。

学習者は短期間の人、また毎月のように新しい人が入ってくるため、教材は『みんなの日本語初級』Iをベースにしたが、教室ではあまり教科書を開くというのではなく、様々な場面での挨拶、自己紹介、母国の紹介など、繰り返すごとに使う語彙を増やしていくようにし、日常生活に必用な形容詞、動詞の復習を繰り返し練習した。文型練習としては『絵でマスター日本語文型85』を使った。

受講者の背景が違い何でもノートに書こうとする人、話すことのみでいいと考えている人、日本語の音が入らない人（中国人女性2）等、導入方法、文型練習、発音の時間に要する時間配分に試行錯誤した。また、毎月のように新しい人が入ってくるため、同じようなことを繰り返さざるをえなかった。先に学習していた人たちからの情報で『みんなの日本語』を図書館から借りていたり、コピーを持っていたり文法解説書をもっていたりしたが、半年や1年位のコースで毎回出席できない学習者にこの教科書が最適とは言えず、今後教材を再考しなければならないと痛感した。

初中級

受講者：11人。中国8人、イラン1人、バングラデッシュ1人、韓国1人。

主教材：『みんなの日本語初級』II

副教材：『続・クラス活動集131』

『みんなの日本語初級II初級で読めるトピック25』

『みんなの日本語初級II文型練習帳』

『実践日本語シリーズ 擬声語・擬態語（初・中級）』

『実践日本語シリーズ 慣用句（初・中級）』

聴解教材：『初級・毎日の聞き取り50日』下

『楽しく聞こう』I II

『絵とタスクで学ぶにほんご』

ビデオ教材：『続ヤンさんと日本の人々』

生教材：『読売新聞』『朝日新聞』『日本語ジャーナル』

初中級コースは前年度初級コースから引き続きの受講者で、ほぼ同レベルでスタートした。受講者は研究生から修士、博士課程に移り、出席率が悪くなってきたが大変熱心な学生ばかりで、主教材の『みんなの日本語初級』IIの35課から始め、ほぼ『みんなの日本語初級』IIの文型項目を終了することができた。

自宅学習で文法解説書に目を通していている学生がほとんどで、文型、文法項目の理解が早く『書いて覚える文型練習帳』もピックアップし、自宅学習用にした。クラスでは文型を使えるよう場面設定をした会話ができるようにした。

特に修士課程に進んだ蘇州大学の学生達の教官であった研究者（中国人・女性）が彼らをリードし、次回に質問を持ってきたり、教室内では中国語、英語を使わないようにしていたこと、またこの研究者と韓国人（女性）は日本人との交流が多く、その生活体験からいろんな話題を提供してくれ、研究室の人以外日本人と話すことが少ない他の学生達も日本人の考え方、習慣などに関心を持ち、会話内容が膨らみ発展できたと思う。

聴解は要望があり、何らかの形で毎回取り入れた。時間的な関係でテープを聞いて内容が理解できること、語彙を増やすことを主眼におき、ディクテーションのような問題はしなかった。6月ごろから聴解教材の内容から新聞などの生教材へ発展することもあった。

読解力は『初級で読むトピック25』が問題なくできるが、新聞の切り抜きに関しては、漢字にはふりがな、難しい言葉、文型は説明を加えたシートを渡すようにした。初級文法では難解な部分もあり時間がかかったこともあったが、非常に関心が高かった。

さらに日本人がよく使う擬声語や擬態語、慣用句にも、興味が出てきたので、少しずつ取り入れていった。

体調を壊し、あまり出席できなくなったイラン人学生は漢字の読み書き以外、聴解、語彙、会話力は中国人学生以上であったが、新聞記事は興味があるが、縦書き、漢字が多いということで少し抵抗があった。このイランの学生とバングラデッシュの学生（2回の出席のみ）のため漢字のシートを準備したが教室ではできなかった。イラン人学生にはシートを渡して宿題にもしてみたが忙しく漢字を勉強する時間がないということであった。

初級も受講している特別研究生（中国人・男性）にはこのコースのレベルが高いと思われたが、一番出席率がよく、他の学生がロールプレイで練習する間、学習内容を変えたりしたが、自宅学習をよくしていてかなりついて来るようになった。

9月に4回補講があったが、一時帰国者、帰国準備、出産、アルバイト等で出席0になることもあり、授業日程については疑問が残る。

このコースは途中参加がほとんどなく、大変熱心な同レベルの受講者で出席率もよく、担当者としては助けられ、感謝している。

平成15年度後期 上田地区 初級 （高橋亨）

受講者：9人

主教材：『みんなの日本語初級』Ⅰ

『みんなの日本語初級翻訳・文法解説』（中国語版）

『みんなの日本語初級翻訳・文法解説』（英語版）

○反省事項

受講者についての把握が充分でなかった。全員、蘇州大学の人と思っていたところ、一人は無錫の江南大学（院修）、別の一人は 西安大学の教員で、短期滞在研究者であった。地域の話題の選択に、はじめの頃、若干の違和感があったかもしれない。前任者が行ったプレイスメントテスト（クラスわけ）の回答紙からの私の判断と、受講者が教室で示した日本語運用力とに差が感じられた。ペーパーテストだけから言語運用力を推測することの難しさを感じた。好意的に意見具申をしてくれた積極的な受講者の意向に依り過ぎて、基礎力が不十分な、控えめな性格の受講者に対する配慮に欠ける面があったのではないかと気にしている。各受講者が、受動的受講にとどまらずに、自発的に自宅学習に励む必要性を感じさせるような方策をとる必要があった。聞き取りに重点を置いたので、書くことの練習が疎かになった。学期末になってから、入試に該当する口頭発表・質疑応答を日本語で行うという方針を示されて不安に思った受講者があった。作文・発表の練習を最終二回の講座で行ったが、「ポリエステル繊維の

更に効果的な染色法の実験報告」など、専門分野のものもあり、手間がかかった。29回60時間未満の教室運用の中で、語学力を格段に高めるような動機付けをどのように行うか、考慮中である。

○副教材と補助教具

- ① 一人芝居用脚付き紙人形
初対面挨拶、相互自己紹介、身辺雑談、質疑応答などを自由発想で行ってもらう時の持ち道具。
- ② 日常生活関連、地域生活関連の資料など
からだの各部位の名前、服装などの着・脱の言い方 図・表
簡易色名表
上田市街地・郊外と周辺地の案内地図
信州上田地域トレッキングマップ
信州よだくば四町村・美ヶ原高原・北アルプス連峰鳥瞰図
担当者居住地和田村紹介リーフレット
- ③ URL 紹介
<http://www.nhk.or.jp/daily/chinese>
<http://www.nhk.or.jp/lesson>
- ④ ひらがな・カタカナ字源表
- ⑤ 聞き取り・発音教材
学内所在研究施設名称、各学科名称一覧
学内身分呼称
- ⑥ 読みと発音の練習表 重母音、長母音、促音、拗・直音、清・濁音
- ⑦ 語彙整理・拡大を兼ねる発音練習表
名詞「～もの」、「しゃ（者）」、「にん」、「じん（人）」
形容詞・句、連体詞、副詞・句（『新明解国語辞典四』が選定している最重要語1021語、重要語2412語からなど）
「～的な」を作る語幹部分の辞句
「平板アクセント語」を作る接尾辞
活用形式、アクセント型、意味内容が異なるが、基本形（辞書形）のひらがな表記が同じになる動詞表
「漢字一字+する」型の動詞で「ない形」が「～さない」となるもの、「～しない」となるもの表
「～ずる」がよく使われるもの 付随
- ⑧ 動詞の「法」「相」「態」にかかわる語尾部分 表、文例と説明
- ⑨ 日刊新聞の記事、月刊誌の記事などを参考に自由会話
日本人はどこからきたか、中国の古代遺跡、蘇州と周辺地域、「神舟」、孫文の切手、大学内外のトピックス、新幹線方式、地震と火山、カタカナ外来語を言い換える

平成15年度後期 上田地区 初中級 （井出礼子）

受講者：12人。中国男5人、女5人、イラン女1人、バングラデッシュ男1人。

主教材：『新日本語の中級』

副教材：『実践日本語シリーズ 擬声語・擬態語（初・中級）』

『実践日本語シリーズ 慣用句（初・中級）』

『実践日本語シリーズ副詞（初・中級）』

『日本語ジャーナル』

聴解教材：『中級 毎日の聞き取り50日』上下

初中級コースの後期は前期から曜日、時間が変更された。前期から引き続き受講した学生は3名（中

国人・男性2名、イラン人・女性1名)で、他に9月に来日した研究生2名(中国人・男性・女性)、教育学部研究生(中国人・女性)、研究者1名(中国人・男性)。前期熱心だった中国人・女性達は登録したものの1度も受講しなかった。

授業に際して受講者と話し合ったところ、日本人との会話内容を深めたいという「話すこと」、「聞くこと」へのニーズであった。

主教材は『新日本語の中級』を使用することにした。このテキストは企業研修生向けで社内、地域社会での実践用のため、内容的にももちろん学生に適さないところもあるが、各課毎に実際に体験すると思われる場面設定をしてあること、漢字にふりがながあること、『みんなの日本語』で学んだ文型も復習しながら、省略の多い会話的な表現になれることであった。また、社会生活の幅を広げられるような”読みもの”があること、語彙や文法項目の運用練習問題が自習用にいいと思われた。

会話はテキストの場面の順位ではなく学生の希望で優先順位を決めた。9月から受講した学生は未習の文型があり復習に時間を取らざるをえなかった。丁寧体で学習してきた学生は、”話し言葉”の短縮形、省略には戸惑いもあったが、様々なロールプレイを通し想像力を発揮していった。課によっては白熱したディスカッションやディベートにもなった。『日本語ジャーナル』にこのテキストの場面と同様のものがいくつかあり、適宜紹介した。

聴解は『新日本語の中級』の「聞こう」は必要と思われる課と『中級・毎日の聞き取り50日』も内容を選び、毎回取り入れた。いずれも書く練習も付いているが内容を理解できているかに焦点をおき、口頭でのQ・Aで確認をするにとどめた。

聴解に関しては前期から引き続きの学生と9月来日の学生とはかなりレベル差があり、新しい学生からは何度も聞きなおしの要求があり、15分位の予定が30分になることもあった。聴解に時間を懸けすぎたのではないかと思う。

”書く”ということはほとんど取り上げてこなかったが、「頼む」のような場面で、ホテルに宿泊を依頼する文、奨学金をもらうため推薦状を先生に依頼するEメール、書いてもらったお礼のEメールなどを練習し、各人が書いたのを検討しあった。書いてみると、助詞の間違いや、丁寧体と普通体が入り混じったり、文を必要以上に長くしてしまうなどの問題点が見られた。話す、書く、読む、聞くの4技能から考えると、”書く”ことをもう少しやればよかったと反省している。

また、「症状を伝える」では、中国語、英語の訳の付いた問診票を取り寄せ、記入する練習をした。この場面ではかなり擬声語・擬態語を入れた。学生達は擬声語や擬態語は耳にしても理解できていない言葉が多く興味を示し実用的なものから順に紹介していった。

”読む”は特に読解向けの教科書を使用せず、『新日本語の中級』の「読もう」を中心にした。「買い物をする」では実際の様々なチラシ、広告からどんな情報が読み取れるか、その他関連する簡単な新聞記事を読むこと、グラフを見てその情報を文に表現する練習などであった。特に要望はなかったが、中国のレベルの高い学生には読解的なものを入れたほうが良かったのではないかと思う。

主教材の『新日本語の中級』は20課中学習できたのは11課で、初中級コースの計画としてはもう2課位学習できれば良かったのではないか、文法的な表現の学習が少なかったのではないかと反省している。

平成15年度 日本語補講「SUNS 中級」

平成13年4月より、信州大学の計5キャンパスの留学生を対象に、SUNS (Shinshu University Network System) を用いた中級補講が開始され、平成15年度も継続して実施された。この授業は、開始当初より留学生センターの佐藤が担当している。テレビネットワークシステムを用いた語学の授業は、信州大学ではおそらくこの「SUNS 中級」のみであり、「SUNS が語学にも活用できるか」という視点では、この授業の継続は重要なことと言える。平成14年11月には、富山大学留学生センターから「遠隔授業を行っている実例」として講演依頼を受け、この授業の実情・問題点などについて講演を行った。

授業は、火曜日と木曜日の週2回実施されており、曜日ごとに指導内容が異なっている。まず火曜日は、『日本語中級 J301』を主教材に用いて中級レベルの日本語の文型・語彙の指導を行い、平行して

初級レベルの重要文型の復習を行っている。一方、木曜日は、『日本を話そう 15のテーマで学ぶ日本事情』を用いつつ、ネットや新聞で最新の日本事情を入手しながら授業運営をしている。この授業の参加学生の国籍は5つ以上と多いので、それぞれの国の事情と日本事情を比較しつつ、理解を深めるよう努力している。

受講者数は、平成15年4月から16年3月まで、5キャンパスで述べ50名であった。

日韓共同理工系学部留学生事業予備教育

日韓共同理工系学部留学生事業による留学生は、本学では平成13年度に初めて受け入れたが、平成14年度には本学を希望する学生がなく、この事業での予備教育は行われなかった。平成15年度には本学を希望する学生が4名あり、受け入れた。予備教育を前回同様、留学生センターが行った。学生の内訳は、工学部3名（男2、女1）、農学部1名（男）である。

・学生の来日まで

今回の学生は、同事業の第4期であるが、韓国においての合格と同時に日本での配置大学を決めることになっていた。本学には最初3名の配置予定であったが、追加が1名あり、結果として4名になった。

韓国での入学は3月である。学生宛の激励の文書（日本語・ハングル）と本学紹介のパンフレットを送付した。それに対して学生たちから電子メールで返事が来た。それ以後こちらからは、毎月1回以上、電子メールで激励の文書を送ることにした。郵便で、学生たちが松本に来てからの住宅に関する情報を送ったりすることもあった。このようにして来日前からできるだけ連絡を取り合うようにこころがけた。

来日時の交通のことも電子メールなどで打ち合わせることができ、無理なく迎えることができた。

・予備教育の内容

今回の予備教育は、日本語に関しては日本語研修コースにおいて行った。日本語研修コースは午前・午後ともに授業があるが、その午前中の授業のみに出席して学習した。午後は別の授業とした。午後の授業は次のとおりである。開講時期は日本語研修コースに合わせた。

数学演習・工学日本語数学	各1コマ	（小柴善一郎）
物理演習・工学日本語物理	各1コマ	（森覚）
化学演習・工学日本語化学	各1コマ	（川崎貴史）
生物演習・工学日本語生物	各1コマ	（益永淳二）
総合指導	1コマ	（上條厚）

・日本語の能力

日本語の能力にはばらつきがあった。ただし皆相当に進歩した。

・理工系の授業

理工系の授業は前回同様、謝金講師に依存した。予算上の問題もあり、これを今後どうしていくべきかは課題である。

・課外活動

教室以外での学習活動も行われた。松本および日本のことに慣れるために、松本駅でいろいろ調べたり、松本市内を歩いたりもした。

・生活指導

学生たちの中には真面目な学生から授業に欠席がちな学生まで、様々な学生がいた。真面目な学生は本当に真面目であったが、中には授業に関して問題とすべき学生もあった。どのような指導がよいか、考えるべきことであろう。

資料 平成15年度日韓共同理工系学部留学生事業（第4期）予備教育修了学生

吳 燦 (オー・ヒョク)	男	韓国	1984. 5 .16生	工学部情報工学科
金 恩敬 (キム・ウンギョン)	女	韓国	1984. 9 .25生	工学部機械システム工学科
李 承勳 (イー・スンフン)	男	韓国	1984.12. 4 生	工学部電気電子工学科
孫 成鎬 (ソン・セーホ)	男	韓国	1985. 2 .12生	農学部食料生産科学科

相談・指導業務

1 信州大学留学生センターの相談・指導業務の実際

信州大学は、5キャンパスに8学部という分散型キャンパスで構成されている

○大学本部、および留学生センターや4学部のある松本市旭キャンパス

・留学生センター

教官それぞれが、週に一日、オフィスアワーを担当している。しかし、実際には、オフィスアワーだけに限らず、随時相談に応じている。対象は、旭キャンパスの留学生にとどまらず、信州大学に在籍する全ての留学生およびその関係者である。

・人文学部：坂口和寛留学生専門教育担当教員による相談・指導業務。41名

・経済学部：秋庭裕子留学生専門教育担当教員による相談・指導業務。75名

(2003年9月より秋庭裕子氏の後任として梶浦真樹子氏が赴任)

・理学部：留学生専門教育担当教員が配属されていない学部。12名

・医学部：牧かずみ留学生専門教育担当教員による相談・指導業務。54名

○それ以外の4キャンパス

前述の留学生センター教員による松本市旭キャンパス以外の4キャンパス訪問相談・指導業務のうち、全体の3分の2に当たる村瀬教員の担当分は、主に保健室とタイアップしての相談・指導業務である。その他の4教員の訪問相談・指導業務は、日本語および日本事情教育指導を通じての、相談・指導業務である。

・教育学部：留学生専門教育担当教員が配属されていない学部。16名

・工学部：高野嘉寿彦留学生専門教育担当教員による相談・指導業務。101名

・農学部：留学生専門教育担当教員が配属されていない学部。54名

・繊維学部：鮑力民留学生専門教育担当教員による相談・指導業務。53名

*人数は何れも平成15年5月1日現在の各学部の留学生数

○教育学部（長野市の西長野キャンパス）と多数の留学生が在籍する工学部（長野市の若里キャンパス）では、引き続き、ボランティアの日本語教師（英語教師でもある）北澤先生の尽力に負うところが大きい。氏は、連日、両キャンパスを交互に訪問し、終日、希望者に日本語指導を行い、必要ならば相談にも応じておられる。工学部の要請で英語のプログラムも始められた。

○また、各キャンパスでの保健師や補講担当の日本語教師の尽力に負うところが大きい。

保健師：特に、日本人の留学生専門教育担当教員がいない繊維学部の斉藤巴保健師、留学生専門教育担当教員が配属されていない農学部の武田弘子保健師。（他に工学部の徳原さえ美保健師、教育学部の高橋豊江保健師。）

補講担当の日本語教師：農学部の高石久美子氏、山本もと子氏。長野（工学部・教育学部合同）の青柳にし紀氏、今村一子氏、合津美穂先生（この3名は、非常勤講師でもある。今村氏は2003年3月末まで）。2003年4月よりは前記3名に代わって荻久保千秋氏が担当。繊維学部の井出礼子氏。松本キャンパスの村田満見子氏。また、各学部の留学生担当の事務職員は、常に留学生と接する立場にある。

繊維学部：中村正一氏（熊木明彦専門職員の後任として2003年4月より）

農学部：小野英二氏

工学部：福澤賢一郎氏

教育学部：井口祥子氏

2 相談指導の概況

(1) 相談・指導の件数

留学生センターの教官、非常勤講師および謝金講師が、2001年10月～2002年9月の間に扱った相談・指導件数を以下に示す。

2002年10月～2003年9月

項目 件数

- a. 修学関係 182
- b. 学内諸手続き 42
- c. 来日・滞在 20
- d. 経済問題 87
- e. 宿舎探し 48
- f. 人間関係 61
- g. 家庭 14
- h. 健康・医療 252
- i. 交流 120
- j. 事故・事件 17
- k. その他 8

*注意点：留学生課の対応分以外の相談・指導件数の概数である。件数の数え方、および、内容の解釈が、教員（講師）により若干異なる。また、今期は、これまで“k. その他”に含めていたものを、ある程度“i. 交流”に含めた方が良いと判断した。

(2) 相談・指導の内容

相談内容の分類方法はいろいろあろうが、ここでは、一応、以下のよう分類した。

- a. 修学関係（勉学／日本語学習／学位／就職などの進路／その他）
- b. 学内諸手続き（学費減免／奨学金申請／その他）
- c. 来日・滞在（入国／在留／その他）
- d. 経済問題（奨学金／アルバイト／学費／生活費／その他）
- e. 宿舎探し（学寮／民間寮／アパート／ホームステイ／入居保証／その他）
- f. 人間関係（研究室留学生／研究室日本人学生／研究室教官／事務／アルバイト先／異性／親族／家主／近隣／その他）
- g. 家庭（夫婦／家事／育児／教育／その他）
- h. 健康・医療（体の不調／医療機関への受診／国保／留学生医療補助／入退院／その他）
- i. 交流（チューター／交流／イベント等／ボランティア／雑談など親しい関わり／その他）
- j. 事故・事件（交通事故／遺失／その他）
- k. その他

3 『信州大学と隣接8県の留学生センター相談指導担当教官懇談会』開催

信州大学と隣接8県8大学の留学生センター相談指導業務担当者（愛知県南山大学は、元日本語別科長）9名による『信州大学と隣接8県の留学生センター相談指導担当教官懇談会』を、2003年3月14日（金）に信州大学で開催した。

懇談会では、各大学での相談指導業務特色と、現状ないし問題点、および将来の展望について発表を行った結果、相談指導業務を学問的に高める必要があること、そのために、留学生センター指導業務のコアとして、異文化交流指導を学問的に追究すべく研究会を立ち上げることなどが話し合わせ、2003年9月19日（金）開催の準備会を経て承認された。そうして、2003年12月16日に、異文化交流指導研究コンソーシアム設立記念シンポジウムを信州大学にて開催した（これについては、年報第5号

で紹介する)。この試みは、独法化を目前に控えた他の国立大学など、関係者から注目されている。懇談会出席者は、以下の通りである。

出席者一覧（敬称略、官職は何れも当時）

松元 宏行	群馬大学留学生センター教授	群馬県
山本 一男	埼玉大学留学生センター教授	埼玉県
小泉 均	山梨大学工学部講師・留学生専門教育担当	山梨県
原澤伊都夫	静岡大学留学生センター教授	静岡県
伴 紀子	南山大学教授（元外国人留学生別科長） 外国語学部日本語学科長を兼任	愛知県
太田 孝子	岐阜大学留学生センター助教授	岐阜県
出原 節子	富山大学留学生センター助教授	富山県
阿波村 稔	新潟大学留学生センター教授	新潟県
村瀬さな子	信州大学留学生センター教授	長野県
内藤 哲雄	信州大学留学生センター長	（挨拶）

なお、この懇談会の報告書を、2003年7月に発行したので、その巻頭言をここに掲載しておく。

『信州大学と隣接8県の国立大学留学生センター相談指導担当教官懇談会』

はじめに

国立大学は、いよいよ平成16年度に独立行政法人化を迎える。これまで、文部省の指導のもと横並びを強いられてきた国立大学が、個性化を図るよう、一夜にして180度の舵取りの転換を求められることになる。各国立大学は、私立大学に範を求めるなどして、生き残りのための方策を懸命に模索しているところである。

さて、平成14年度末の平成15年3月14日、信州大学留学生センターでは、信州大学と隣接8県の留学生センター相談指導担当教官による懇談会を開催し、各留学生センターの相談指導業務の現状、特色、問題点、および将来への構想などを論議した。

毎年、東京大学や大阪大学などで、相談指導または交流指導のための全国的な会合が開催されるが、留学生センター設置が進み参加大学が拡大するにつれ、情報・意見交換といった開催の当初の目的が、かえって損なわれつつある。参加者にとって、全国規模で同職者と知り合えることに関しては非常に有り難い催しではあるが、近年の大きな会合では、最も得たい情報が得られぬジレンマに陥っていることも事実である。

相談指導業務担当教官は、カウンセラーや、日本語教育、理系出身者、民間経験者など、様々な背景を持つ教官からなるため、相談指導業務とは言っても、その業務内容はそれぞれの専門性を生かして多岐に渡っている。今回の会議で、出席者全員が、これまで行ってきた業務の実際を発表することで、これまでの自らのセンターでの業務を見つめ直すとともに、他のセンターの業務内容を知り得て、より良き自らの業務へのヒントとなるべく有効な情報交換の場となった。

多くの大学では、留学生の相談指導業務は、教官1名だけが担当していることが多い。そのため、各大学の担当者間の、いわゆる横の連携を持つことは、職務遂行上、極めて有効な手段である。相談指導という、人間の内面に深く関与する業務であるだけに、今回のような、“狭く深く”の集まりは是非とも必要なのではなからうか。

さらに、この集まりから、相談指導業務の中核をなす学問への模索も検討された。国際交流の必要性が叫ばれている現在、この会合を契機にして、国際交流を学問的に高められれば幸いである。

平成15年7月 信州大学留学生センター長 村瀬 さな子

4 留学生センター企画による全学留学生見学旅行について

信州大学全体の留学生の交流をはかるための、留学生センター企画による全学留学生見学旅行を、今年度は、9月26日（金）、27日（土）の両日、東京ディズニーランド&浅草への一泊旅行として実施した。

この全学留学生見学旅行は、巡回相談指導業務において、各キャンパス（分散学部）の留学生から、キャンパス間の交流を図りたいと、いつも強く要望されることからその必要性が明らかとなったもので、2000年9月29日（金）には明治村へ、2001年9月28日（金）には日光へ、2002年9月27日（金）～9月28日（土）には奈良への旅行を実施した。

今年度の旅行も、予め行った旅行についてのアンケート調査の結果に基づき実施されたもので、昨年度、古い日本文化探訪を泊旅行でという要望に応じて奈良への一泊旅行となったのに引き続き、今年度は新しい日本へという要望に応じて、東京ディズニーランド&浅草への一泊旅行となった。

参考：留学生223名からの回答が得られ、(2)留学生センターの旅行は、「あったほうがよい」207名、「どちらでもよい」11名、「やめたほうがよい」0名、(3)“どこへ行きたいですか”の質問には、「古い日本（例：京都など）」112名、「新しい日本（例：ディズニーランドなど）」71名、「その他」14名、(4)旅行は、「日帰りがよい」21名、「一泊がよい」157名、「どちらでもよい」47名、(5)“一泊旅行では、お金を払うことになるかもしれませんが。いくらぐらいなら払ってでも行きたいですか。”の質問には、「3000円まで」69名、「5000円まで」100名、「10000円まで」29名、「10000円以上でもよい」7名、「お金がいるなら行きたくない」10名、との結果が得られた。（「センター主催見学旅行へのアンケート調査結果」『留学生センター紀要』第3号より引用）

(1) 第4回留学生センター企画による全学留学生東京ディズニーランド&浅草見学旅行

松本市（留学生センター／共通教育・経済学部・理学部・医学部）、長野市（教育学部キャンパスと工学部キャンパスとが合流）、南箕輪村（農学部）、上田市（繊維学部）の各キャンパスから、例年通りバス1台ずつを発車させ、計4台のバスを運んで奈良まで一泊旅行した。

第1日目：東京ディズニーランド

第2日目：留学生ミーティングと浅草

参加者：留学生センター／共通教育（遠隔地学部の留学生だが、1年生のため松本キャンパス在住）7名、経済学部1名、理学部4名、医学部15名、以上松本キャンパス。教育学部3名、工学部23名、農学部28名、繊維学部19名。合計100名。各キャンパスより引率教職員計10名。学生・教職員の合計110名であった。

(2) 旅行後のアンケート調査結果（回答者：53名）

○東京ディズニーランドはどうでしたか。理由があれば、それも書いて下さい。

- ・とても良かった：工学部17名、農学部13名、教育学部2名、理学部2名、医学部4名、共通教育（遠隔地学部の1年生）3名、計41名

理由：楽しかった。遊園地の遊びで、交流だけでなく、ストレスの解消にもつながりました。人間の身体に合うように作った娯楽施設だから。初めてだったので、色々なものを見て楽しかった。いろんな人と話が出来て良かった。世界ですごく有名なディズニーランドに行って、現代の日本文化を感じてよかったです。初めて行って、とても面白かった。ディズニーランドはとても面白かった（2名）。初めて行ったが、遊びが多く楽しかった。沢山の友達と一緒に行くのが楽しい。大人も子供も、楽しく見学したり遊んだりすることが出来るから。気分転換になった。エキサイティブだった。旅行に行けて嬉しかった。世界の4カ所の一つで、規模が大きく設備が多い。見るもの聞くもの全てが珍しく感じた。とても楽しかった。日本最大の娯楽施設を体験させていただいた。きれいで楽しかった。先生と学生と一緒に遊べた。時間もたっぷりあった。先生や友達と一緒に行けたので仲良くなれた。友達と先生と一緒に

いられたから。ずっと行きたかったが、やっと思行けました。素晴らしいデザインで、楽しいゲームばかりでした。人工的な遊園地として凄かったし、パレードも素晴らしいかった。

・大体良かった：工学部3名、農学部5名、医学部2名、計10名。

理由：雰囲気は良いが、少し子供っぽい感じがしました。時間が少し短かった。景色がきれいだった。楽しかったが時間が少し短かった。最後の花火を見たかった。ディズニーランドのような遊園地に行ったのは初めてで、色々なことを体験して楽しかった。基本的に子供向けのイベントが中心だったため。面白いものがいっぱいあったが、時間が少なかったので、ちょっとだけ遊びました。刺激的なゲームが大好きです。

・まあまあ（ふつう）：工学部1名。

理由：自分の想像以上は行ってなかった。

○宿泊ホテル（幕張プリンスホテル）はどうでしたか。理由があれば、それも書いて下さい。

・とても良かった：工学部16名、農学部8名、教育学部1名、理学部2名、医学部1名、共通教育（遠隔地学部の1年生）3名、計31名。

理由：洋式で、ちょっと狭いが設備が良いです。日本でこんな高級なホテルに泊まれて、さらに海に面していて、大変素晴らしい体験でした。建物のデザインがいいし、室内もきれいだから。先生達のお陰で、少しお金を出すだけでこんなにいいホテルに泊まれて感動しました。海に面したホテルのロケーションがとても素晴らしかった。対応が良かった。サービスが良かった。居住条件が大変良く、静かだった。サービスがとても良かった。ホテルはきれいですが、東京には少し遠い。凄くきれいで、設備も完璧。夜景の眺めが凄くきれいだったから。静かな雰囲気で、海も眺められる。

・大体良かった：工学部4名、農学部4名、教育学部1名、医学部2名、計11名。

理由：きれいだと思ってます。一人一部屋ならば最高。値段が少し高かった。窓から海が見えて良かった。ホテルは海が近かったので良かった。

・まあまあ（ふつう）：工学部1名、農学部6名、医学部3名、計10名。

理由：一名室に二人泊まった。二人一部屋ではちょっと狭いし、お互いに邪魔だったかもしれません。特に。ちょっと狭いです。おゆが取りにくかったし、ベッドが二人で違うし、ヘアドライヤーを使わなかった。

○浅草はどうでしたか。理由があれば、それも書いて下さい。

・とても良かった：工学部13名、農学部9名、教育学部2名、理学部1名、計25名。

理由：本当の日本を感じる。日本を代表するお寺の見物を通して、日中の仏教文化の深い関わりを再認識することができました。日本文化がよく分かってきました。人々の落ち着く場所だから。日本の文化を学ぶチャンスが出来て、本当にありがとうございます。東京の下町観光は久しぶりだった。古い日本文化を勉強できて良かったです。有名なお寺を訪問でき、また、お寺の前のいろいろな店がとても魅力的だった。日本の伝統的な建物は素晴らしい感じだったし、あそこの日本人もやさしかったです。日本の有名な所を、皆と一緒に遊覧するのがとても良かった。古い街並みのお寺、神社などを見ながら、買い物などを通じて、いわゆる“下町”の人々と触れ合ってより日本の歴史・文化を理解しました。また、鳩とふれあって楽しかったです。お寺が良かった。お寺がすばらしい。日本の古い文化を見学させていただきました。浅草寺は長い歴史を持ち、偉大なので。

・大体良かった：工学部5名、農学部5名、理学部1名、医学部4名、共通教育（遠隔地学部の1年生）3名、計18名。

理由：日本の古い文化を見ました。古い文化を教えてもらい良かった。鳩が身の上におりる時、一番楽しかった。ここにはあまり興味がありません。お寺はどこでも大体同じじゃないかなと

と思いますが。江戸時代の姿が分かりました。

- ・まあまあ（ふつう）：工学部3名、農学部3名、医学部2名、計8名。

理由：特徴が少なかったですが、日本の破瓜の街と同じくらいだと思います。暑かったし、東京タワー・新宿・都庁の方がよい。時間が少なかったし、ガイドさんがいなかったの、文化のことを深く知ることができなかつた。伝統的なお寺などあまり興味がない。

- ・あまり良くなかつた。：農学部1名。

理由：特に面白い所がなかつた。

他に、旅行全体への感想として、

- ・もっとこのような旅行に参加したいので、是非またこのような旅行を行って下さい。（工学部）
- ・ありがとうございました。二日間の旅行はとても楽しかつた。日本で一番大きな都市の姿を鑑賞させていただきました。よかつた！（農学部）
- ・今度は大阪（USJ）へ行きたいです。（共通教育／遠隔地学部の1年生3名）などがあつた。

旅行後の感想文を求めた（一部の学部には、当方の手落ちで通知漏れがあつた）ところ、参加学生より多数の感想文が寄せられた（特に、工学部生）。

現代日本としての東京ディズニーランドと、翌日の見学地浅草で古い日本文化を理解したという感想が多かつた。

また、二日目の朝、参加学生および教職員で、ミーティングを持った。それについて、

- ・同じ信州大学の学生だけど知らない人の方が多いが、会議のお陰で、いろいろの国からの学生と話が出来、他の学部の学生が、普段何を研究しているのかも分かり合え、信州大学に対して理解が深くなつた。
- ・他のキャンパスの留学生や先生達と話が出来て良かつた。
- ・同じ信州大学の留学生なのに、キャンパスがバラバラになっているため、全然知らない人が多かつたが、みんなの研究テーマを聞いたり、生活上の面白い話を聞いたりして、とても印象深かつた。
- ・集会で、皆が自己紹介して、困つたことなどお互いに相談し合えた。
- ・プリンスホテルでの美味しい朝食の後、長野、上田、松本、伊那からの留学生と交流できた。
- ・この会合は、他のキャンパスの学生達と親しくなれる良い機会だつた。

などの意見が寄せられた。

独法化後も引き続き、この全学見学旅行を行えるかどうかは分からないが、少なくとも、旅行を始めることになつたきっかけである、分散キャンパス間の学生同士が交流したいという素朴な留学生の思いは、信州大学のキャンパス間の学生交流を主目的とすることに絞るならば、大がかりな旅行はできなくとも、学生（留学生のみならず、今後は日本人学生も）や教職員のミーティングとして継続出来そうである。

活 動 記 録

1. 在住外国人支援座談会 —地域と大学との協働を考える—

信州大学と大学をとりまく地域が協働して在住外国人問題に取り組むことができないかを模索するために、在住外国人支援座談会を実施した。以下のような流れで行った。

日時：3月1日（土） 午後
場所：人文学部 3F 第4講義室
受付 午後1時から
開会 午後1時半（司会 上條先生）

センター長挨拶

現状報告・長野県 春原直美（長野県日本語ネットワーク代表）

現状報告・全国 野山広（文化庁文化語課）

（休憩（10分程度））

討論（司会 佐藤先生）

1. 地域と大学との協働

① ボランティアとの協働

② 行政との協働

2. 地域間の連携（ネットワーキング）

3. 在住外国人の日本語ニーズ

閉会 午後5時ごろ

参加者（五十音順）

- ・足立 祐子（新潟大学留学生センター）
- ・尾崎 明人（名古屋大学留学生センター）
- ・熊谷 晃（長野県総務部国際課）
- ・春原 直美（長野県日本語ネットワーク）
- ・武田 里子（国際大学学生センター）
- ・田中 美帆（アルク）
- ・寅野 滋（東京大学留学生センター）
- ・野山 広（文化庁）
- ・春原憲一郎（AOTS）
- ・松岡 洋子（岩手大学留学生センター）
- ・米勢 治子（東海日本語ネットワーク）
- ・松本市役所広報国際課
- ・松本市中央公民館
- ・ほか長野県内の行政機関、国際交流団体

[感想]

この問題に関わる全国的にも著名な方々に多数集まっていたことができた。しかし、会の前半部分に必要以上に時間がかかり、最も重要な部分である「討論」は時間不足で終わってしまった。そのため、会場からの意見を聞くこともできず、消化不良の感はぬぐいきれなかった。参加者からも、「せっかく

信州に来たのだから、もっと言いたいことがあったのに」という感想が多かった。しかし、会の後も参加者間で活発な意見交換がなされ、その後の発展的な活動につながったケースもある。その意味では意義があったと言える。

2. 『信州大学と隣接 8 県の留学生センター相談指導担当教官懇談会』開催

P 40に掲載済

3. 2003年11月コンソーシアム

第一回異文化交流指導研究コンソーシアム・シンポジウム

大学経営と国際交流

- 日時 平成15年12月16日(火) 9:15~15:30
- 会場 信州大学旭会館大会議室(松本市旭3-1-1)
- 主催 異文化交流指導研究コンソーシアム
信州大学留学生センター

平成15年10月に中央教育審議会から文部科学省に提出された中間報告『新たな留学生政策の展開について』によると、「我が国が諸外国との友好関係を維持するとともに、国際競争力を強化していくためには、留学生交流は今後ますます重要性を増すと考えられる」、「留学生センター等を中心として学内の関係部局が一致協力し、留学生交流を着実に実施できる体制を確立すべきである」とあります。

そこで、より一層の国際交流の推進及び国際交流に関する様々な問題に対処するため、中部圏大学の教官を中心に“コンソーシアム”を設立しました。

このシンポジウムでは、国際交流を様々な角度(大学経営・日本人学生の海外派遣・異文化コミュニケーション能力の向上)から検証したいと思っています。

プログラム

- 9:00 - 9:15 受付
- 9:15 - 9:30 信州大学学長挨拶
異文化交流指導研究コンソーシアム代表幹事挨拶
- 9:30 - 11:00 講演1「国立大学法人化後の大学経営と国際交流」(仮題)
慶應義塾大学総合政策学部教授 孫福 弘
- 11:00 - 12:30 講演2「留学生交流を考える〜派遣留学について」(仮題)
名古屋大学留学生センター教授 三宅政子
- 12:30 - 13:30 昼食
- 13:30 - 15:30 午後の部 分科会
講演&ワークショップ「国際交流と異文化コミュニケーション」
桜美林大学文学部教授 荒木晶子
- 15:30 - 16:15 交流会(お茶&お菓子)

交 流 事 業

留学生センターは共通教育「日本語・日本事情」、日本語研修コース、日本語補講の授業や隔地の学部訪問を通して直接に、また、各学部の留学生担当教官を介して間接に、相談・指導から日常の会話にいたるまで、学部・研究科留学生といろいろなつながりを持つように努めています。さらに、留学生センター談話室や国際交流会館で催すパーティや全学留学生研修旅行など、交換留学生も含め、信州大学で出会った全留学生と日本人学生・教職員との交流を深める機会を多くする工夫をしています。このような努力は大学内だけではなく、松本キャンパス近辺の小中学校、市町村さらに留学生支援のボランティア等が主催する交流事業への参加を呼びかけるとともに、その仲介役を積極的に行っています。

○留学生の交流活動

団 体 名	交 流 活 動 の 名 称
梓川村教育委員会	留学生と青少年のつどい
東信留学生ファミリーの会	新入留学生歓迎会
いけばなインターナショナル信濃支部	いけばなの会
長野日中友好協会	日中友好キャンプ、スキー交流会
松本留学生応援ファミリーの会	松本ぼんぼん、留学生ふれあいパーティー
佐久商工会議所	留学生との交流会
長野市	長野びんずる
南箕輪村	マレットゴルフ交流会
千曲会・信州大学繊維学部	留学生との国際交流
松川村社会福祉協議会	国際交流会
塩尻市	国際交流まつり、サッカー大会、ワインセミナー
長野県青年国際交流機構	地球人になろう
長野県留学生交流推進協議会	会員との交流会
伊那市・信州大学農学部	農学部留学生との交流会
信州大学工学部	長野地区留学生支援団体との懇談会
松本東ロータリークラブ	留学生日本語スピーチコンテスト
円福友の会	留学生に本を贈る会
松本ソントクラブ	留学生と日本の若き世代の交流会
長野県松本青年の家	みんな友達世界の仲間ー国際交流
松本ワイズメンズクラブ	留学生作文コンテスト

○長野県留学生交流推進協議会

長野県留学生交流推進協議会は、長野県内における留学生の受入れの促進と交流活動推進のために平成2年3月に設けられています。信州大学長が会長を務め、県内の大学、高等専門学校、県内の公的機関、経済団体、国際交流関係団体の長又は代表者によって組織されていて、信州大学学生部留学生課が庶務を行っています。

平成15年11月4日（火）に信州大学事務局第1会議室において、長野県内の高等教育機関、地方公共団体、経済団体、国際交流関係団体及び副学長、留学生センター長、事務局長、学生部長等の関係者37名が参加し、平成15年度長野県留学生交流推進協議会総会・運営委員会合同会議が開催されました。

協議会は、会長を務める小宮山信州大学長のあいさつの後、「会報の編集」、「留学生に関する諸問題」及び「留学生の長期ホームステイ」について等の議題や「各団体の活動報告」等があり、留学生の積極的な受入れと国際交流のさらなる充実に向けた活発な協議が行われました。

また、東京入局管理局長野出張所による「入国管理局からの業務等に関する説明」があり、都市部で

問題になっている不法就労・残留等について最近の動向や留学生支援充実の必要性を改めて確認する会となりました。

○留学生による日本語スピーチコンテスト

松本東ロータリークラブ恒例の「第13回留学生による日本語スピーチコンテスト」は、平成14年11月22日、松本のホテル・ブエナビスタで開催された。事前審査を通過した10人（本学9人、松本大学松商短期大学部1人）が発表し、ロータリークラブ会員のみならず大学関係者、留学生、市民が多数聴衆として参加した。入賞者は例年のごとく3人で、1位はエミ・インダー・プリヤンティ（人文学部・インドネシア）、2位に李野女（人文学部・中国）、3位には 恩恵（経済学部・韓国）が選ばれた。表彰式と審査委員長の講評のあとは、懇親会が行われ参加者全員が思い思いに交流を深めた。

○信州・新潟の留学生に本を贈る会

円福友の会（会長 藤本幸邦（こうほう）住職）が、毎年、長野・新潟両県で学ぶ留学生に本を寄贈している。平成15年度は273人の信州大学留学生に、それぞれが希望する1万円相当の図書が贈られた。会ではこのほかに、信州大学付属図書館に設けた留学生のための特別コーナーに備える図書のために、毎年50万円の寄付をしてくださっている。

また、会は長野・新潟両県の留学生から作文を募集して、それを冊子「留学生の想い」として発行している。平成15年度は55編の作文が「留学生から日本のみなさんへ」という題の冊子にまとめられ、そのひとつずつに藤本住職の評がつけられて掲載されている。

留学生が参加している主な諸行事

(平成15年度)

事 業 名	主 催 団 体 名	開 催 月
国際比較文化話してみよう世界の言葉	丸の内ビジネス専門学校	5～7月
新入留学生歓迎会	東信留学生ファミリーの会	6月
自然とのふれあい例会	いけばなインターナショナル信濃支部	6月
地球人になろう	長野県青年国際交流機構	6月
山形小字校国際交流事業	山形村教育委員会	6～1月
野外いけばなデモンストレーション	いけばなインターナショナル信濃支部	7月
日中友好キャンプ	長野県日中友好協会	7月
留学生歓迎ふれあいパーティー	松本市・松本留学生応援ファミリーの会	7月
留学生との交流会	佐久商工会議所	8月
松本ぼんぼん	松本市・松本留学生応援ファミリーの会	8月
長野びんずる	長野市・実行委員会	8月
マレットゴルフ交流会	南箕輪村	8月
留学生との国際交流会	千曲会・信州大学繊維学部	8月
国際交流会	松川村社会福祉協議会	8月
留學生ホームステイ	長野県国際交流推進協会	8～9月
サマーキャンプ交流	東信留学生ファミリーの会	9月
国際交流まつり	塩尻市	9月
ハッピーハロウィン	塩尻市	10月
留学生料理教室	長野市	10月
青山教養セミナー	いけばなインターナショナル信濃支部	10月
留学生の施設見学会	長野市	11月
会員との交流会	長野県留学生交流推進協議会	11月
農学部留学生との交流会	伊那市・信州大学農学部	11月
留学生と青少年との集い	梓川村教育委員会	11月
長野地区留学生支援団体との懇談会	信州大学工学部	11月
留学生日本語スピーチコンテスト	松本東ロータリークラブ	11月
留学生に本を贈る会	円福友の会	12月
留学生との意見交換会・懇親会	長野工業高等専門学校	12月
留学生とのクリスマスパーティー	松本市・松本留学生応援ファミリーの会	12月
クリスマス例会	いけばなインターナショナル信濃支部	12月
留学生作文コンテスト	松本ワイズメンズクラブ	12月
年末年始留学生ホームステイ	松本市・松本留学生応援ファミリーの会	12～1月
年末年始留学生ホームステイ	東信留学生ファミリーの会	12～1月
新春のつどい	いけばなインターナショナル信濃支部	1月
留学生と日本の若き世代の交流会	松本ゾンタクラブ	1月
みんな友達世界の仲間―国際交流―	長野県松本青年の家	1月
留学生ホームステイ	長野県国際交流推進協会	1～2月
日中友好スキー交流会	長野県日中友好協会	2月
留学生歓迎ふれあいパーティー	松本市・松本留学生応援ファミリーの会	3月
ひなまつり例会	いけばなインターナショナル信濃支部	3月

外部評価の実施

経緯

センター設立当初から、3年目には自己点検・評価を実施し、その翌年にはそれに基づいて外部評価を行うとの方針を立てていたため、2001年度に自己点検・評価を行い、2002年3月に報告書を刊行した。2002年11月から、外部評価の準備に入り、評価委員の人選と委嘱の交渉が開始され、12月には次の5名の委員に決定し委嘱された。

外部評価委員（50音順 敬称略）

池上 徹彦 会津大学学長

内田 勝一 早稲田大学国際教育センター所長（当時、現在は同大学国際教養学部長）

馬越 徹 名古屋大学教育発達科学研究科教授（当時、現在は桜美林大学教授）

中嶋 嶺雄 アジア太平洋交流機構（UMAP）国際事務総長（2004年4月国際教養大学学長）

委員には、あらかじめセンターの評価に利用できると思われる各種資料（年報、自己点検・評価報告書、紀要、センターNEWS、センター主催の各種シンポ・懇談会などの記録など）を送付し、参考に供した。

外部評価委員会

開催日：2003年1月9日（木）

場 所：松本キャンパス共通教育センター第2会議室

参加者：外部評価委員全員

センター教員 センター長 内藤哲雄、教授 村瀬さな子、同 高石道明、同 藤沢文人、
助教授 上條厚、同 村田明、同 佐藤友則

学生部留学生課 課長 平野春吉、留学生係長 藤本哲生、センター係長 林 實

実施手順：

11：00 森本学長表敬訪問

11：30 開会（進行 高石道明教授）

日程説明

センター長挨拶

センター教員、事務官紹介

委員長選出（中嶋委員を選出）

センター概要説明（センター長）

12：45～13：15 昼食

13：15～15：20 事業説明（日本語教育、短期留学プログラム、相談指導、留学生交流について、
主な担当者から説明）

評価委員との質疑応答

15：20～15：50 休憩・施設見学（センター及び附属図書館の留学生用図書コーナー）

16：00～16：30 留学生からのヒアリング（センター関係者退席）

16：30～17：00 国際交流担当副学長村山研一からのヒアリング

17：00～17：20 評価委員打ち合わせ

17：20～17：50 講評

信州大学留学生センター外部評価 評価委員のコメント

2003年1月9日に開かれたレビューにおいて、4人の評価委員から口頭で示されたコメントをまとめ、その後委員から寄せられた加除修正意見を加えたものである。

中嶋委員（会議では4点にまとめられたが、ここでは5項目に置き換えている。）

1 センターの全学的位置付け

この点が必ずしも明確でなくむしろ不十分との印象である。360名に及ぶ留学生を対象にするには、教員・事務職員いずれも少なく、組織に厚みがない。

大学全体の意思決定のプロセスの中で、センターに関する意思決定の仕組みがどのように位置づけられているかも明確でない。各種の関連委員会の相互関係は模索の段階にあり、法人化を控えた今日、留学生政策のみならず国際交流に関する意思決定の機構を、太い線で一本化することが是非とも必要である。

2 学部分散のデメリットの解消

信州大学の学部分散は、地域貢献の観点からはメリットであると思っているが、留学生の対応についてはデメリットが多いと感じる。SUNSを使った教育の手法にも改善の余地があるが、何よりも学部に問題が多いと感じる。学部の留学生担当委員に、留学生問題に関心が強く国際交流にも熱心な人材を選ぶべきである。選挙で選ぶなどという方法では駄目である。適任者を選任しセンターと緊密な連携・連絡が確立されることが極めて重要である。留学生のことに止まらず、重要なところが学部教授会の決定に依存しているのでは駄目であり、学長のリーダーシップが貫かれる体制の確立が望まれる。

3 留学生を知的資産として活用

留学生を信州大学の知的資産として十分活用していない。留学生相互、留学生と日本人学生の交流いずれも少なく、個々がバラバラである。留学生との交流は、いながらにして出来る異文化交流である。

4 的確・十分な情報提供

奨学金、宿舍、催しなどに関する的確な情報が十分に提供されていない。学部の留学生担当教職員に質問しても答えられないことが多いのは問題である。留学生用宿舍の入居でも（国費留学生を優先していることは再考の余地があると思うが）、入居基準をはっきりと示すべきである。留学生の中にはデマンドな者もいるが、出来ないことは出来ないとはっきりと理由を示して説明すべきである。透明性を確保することが大切である。別の言い方をすれば、学生の目線で考えたサービスをするということである。

5 グローバル化の戦略策定

信州大学グローバル化の戦略を早期に策定すべきである。この戦略は、信州に立地していることや信大ならではのもの（信州の豊かな自然と文化、松高の伝統などローカルなもの）をいかに生かして行くか、という観点に立って構想すべきである。

併せて、教員だけでなく事務職員の資質向上の戦略も必要である。

池上委員

1 組織論として、学生部との関係は再構築して欲しい。センターは学長に直結しており、留学生課は学生部長と事務局長を介して学長と結ばれている状態は、どこの大学でも同じだが、活動効率が低く、組織として問題が多い。

また、センターのミッション・ステートメントを読んでのことだが、センターはサービス機関に

徹していいのではないかと思う。サービスという研究はどうするのだ、ということになるが、研究はそれとしてやればいい。対外的には研究もやるという中途半端な言い方はやめたほうが良い。そのほうが解りやすくなり、教員も業務（サービスと教育）に専念しやすくなるであろう。

- 2 留学生への情報提供には、ITをもっと活用すればよい。際限なく資金を使えるわけではないので、ITインフラ強化について、センターで議論して欲しい。
- 3 CS（顧客の満足）の考え方を留学生サービスでも取り入れるべきである。そのために、顧客としての学生のニーズをはっきりとつかむ必要がある。One Stop Shopping（一箇所ですべての情報が得られるサービス）を可能にすることもそのひとつである。また、プライバシーを考慮しつつ留学生の顔写真入り名簿を作ることは、留学生間の交流に役立つのではないか。
確かに留学生はしばしば過大な要求をするが、公正性（フェアネス）と透明性が確保されていて、また無理である理由を良く説明すれば納得するはずである。
- 4 大学の入口論はよく行われるが、出口論に欠けていると考えている。送り出した後のことを考えて、在学中にどのようなサービスを提供することが最もCSにかなうことかを考えて欲しい。
- 5 確かに競争の面からはグローバルに考えなければならないが、何をやるかを考える際には、国あるいは地域のアイデンティティーを大切にすインターナショナルな思考が必要と思う。ユニークなことをやっても不思議に思われない信州大学の特色を十分に生かした戦略が望まれる。
- 6 360人に及ぶ留学生を、管理するのではなく、これを大学発展のための経営資源として考える。経営資源と捉えれば、大きなことが出来るであろう。経営という視点に立つと、目的さえはっきりしていれば、自分でやるか他人と組むか等の多種多様な選択肢があり、何でも出来るはずである。

内田委員

- 1 センターのサービス機能には教育機能も含まれるが、教育について考えても、すべてをやらうとするのは無理である。日本語研修コース、補講、共通教育などこれらは対象も異なり単位の授与制度も異なる、手持ちのリソースとの関連でターゲットをはっきりさせ、中心的部分とマージナルな部分、出来ることと出来ないことの仕分けをするべきである。
- 2 戦略を立てるときには、信州の内陸型産業や文化、山岳観光など、信州のアイデンティティーを活用すれば、それらを研究したり勉強したい学生や研究者をひきつけることが出来る。センターのミッションの特徴を明確に示すことである。
- 3 教員と職員との関係だが、両者が協力してセンターが活性化される。その意味で事務職員の質の向上が重要である。独法化すれば変わるという保障は何もないので、現にある資源を十分に活用できるようにする必要がある。

馬越委員

- 1 限られた時間と教養部解体の困難な条件の中で、センターはこれまで良くやってきたと思う。国立大学のセンターはどこでも同じようなミッションを与えられ、その限りでは当センターも役割を果たしてきてはいるのだが、今後は、学生支援・サービスに集中したミッションを明確に打ち出すべきである。
- 2 その際、国際的公共財としての大学、そこに学ぶかけがえのない財産としての留学生のことを考えつつ、具体的なアクションをとるべきである。留学生政策の総論から各論へ移る段階である。とりわけセンターのミッションを学術交流まで拡大するのであれば、現状のセンターでは無理であるので、資源の有効活用の観点に立ち、出来ることと出来ないことの仕分けをしつつ、各論をつめる必要がある。
- 3 留学生センターの主要な任務は、留学インフラ（日本語教育、宿舎、奨学金、心身のケア等）の整備にあるので、全学及び地域社会の資源をネットワークして、それらの最大化をはかる必要がある。その点で、センターの現状は改善の余地があるように思われる。

- 4 専門教育との関係でいえば、各学部配置されている留学生専門教官との関係の再構築が必要である。留学生専門教官を留学生センターにネットワークして、留学生支援の全学的一本化をはかるべきであろう。

資 料

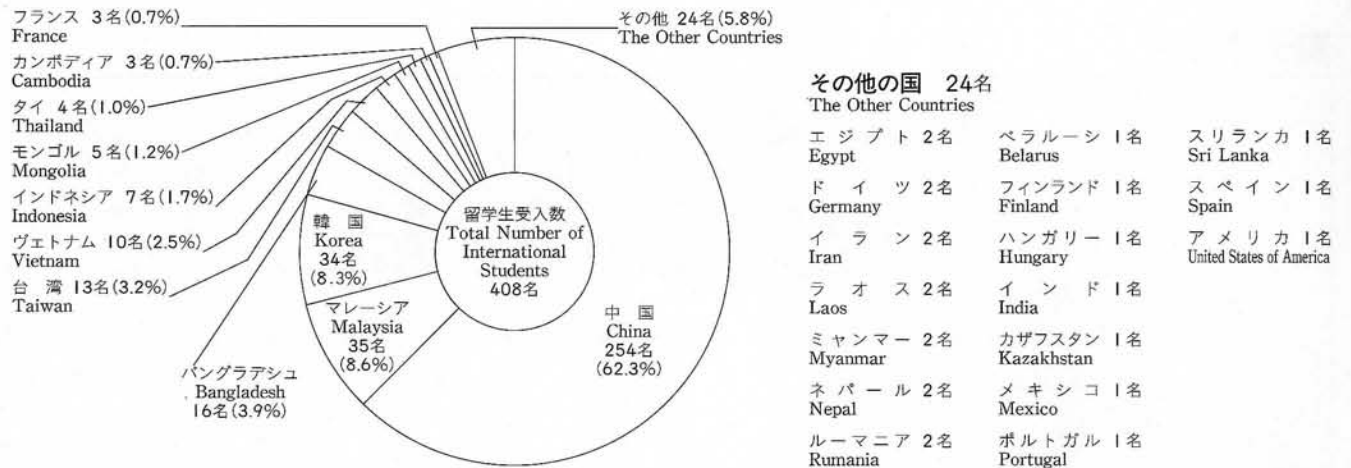
■留学生数

平成15. 5. 1現在
As of May 1, 2003

区 分 Classification		国 費 Japanese Government Scholarship			政 府 Government Scholarship in a Student's Country			私 費 Private Expenses			合 計 Total		
		男 Male	女 Female	計 Total	男 Male	女 Female	計 Total	男 Male	女 Female	計 Total	男 Male	女 Female	計 Total
学部学生 Undergraduate Students	人文学部 Faculty of Arts							8	12	20	8	12	20
	教育学部 Faculty of Education								1	1		1	1
	経済学部 Faculty of Economics		1	1				38	32	70	38	33	71
	理学部 Faculty of Science							1	2	3	1	2	3
	医学部 School of Medicine							1	1	2	1	1	2
	工学部 Faculty of Engineering				14	4	18	34	8	42	48	12	60
	農学部 Faculty of Agriculture							4	6	10	4	6	10
	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology							7	3	10	7	3	10
計 Sub Total		1	1	14	4	18	93	65	158	107	70	177	
大学院学生 Graduate Students	人文科学研究科 Division of Arts							2	7	9	2	7	9
	教育学研究科 Division of Education		1	1				3	3	6	3	4	7
	経済・社会政策科学研究科 Division of Industrial and Social Studies							1	2	3	1	2	3
	医学研究科 Division of Medicine	修士過程医科学専攻 Master's Program in Human Sciences											0
		博士課程 Doctor's Program	2	3	5			20	26	46	22	29	51
	工学系研究科 Division of Science and Technology	博士前期課程 Master's Program	5	2	7			26	12	38	31	14	45
		博士後期課程 Doctor's Program	7	6	13	1	1	14	7	21	22	13	35
	農学研究科 Division of Agriculture		4		4			8	6	14	12	6	18
岐阜大連合農学研究科 (博士課程) The Joint Graduate School of Agricultural Sciences, with Gifu Univ.		5	2	7			7	5	12	12	7	19	
計 Sub Total		23	14	37	1	1	81	68	149	105	82	187	
研 究 生 Research Students		4	2	6				17	13	30	21	15	36
聴講生、科目当履修生 Auditors and Credited Auditors								1	7	8	1	7	8
合 計 Total		27	17	44	15	4	19	192	153	345	234	174	408

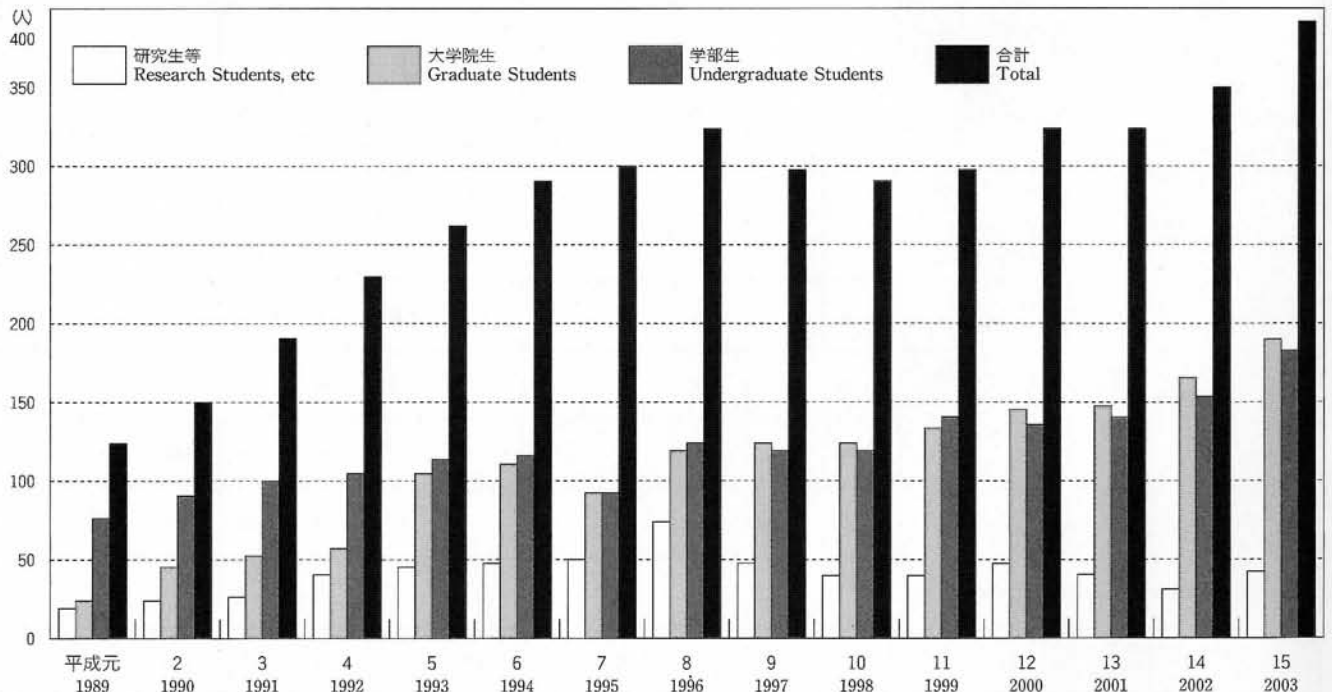
■国別外国人留学生受入れ数

Number of International Students by Nationality



■外国人留学生受入れ数の推移

Yearly total International Students



■交流協定締結大学一覧

大学間協定 Partnership Agreement Between Universities

平成15. 5. 1現在
As of May 1, 2003

国名 Countries	大学名 Name of Foreign University or Institute	締結年月日 Date of Agreement	備考 Remarks
中華人民共和国 China	西南農業大学 Southwest Agricultural University Chongqing, Sishuan	昭和63年3月23日 March 23, 1988	
大韓民国 Korea	江原大学校 Kangwon National University	平成7年10月1日 October 1, 1995	理学部と江原大校環境研究所間の学部間協定（H6. 3.24締結）を大学間協定に変更締結 Agreement between the Universities, changed over from that of the Faculty of Science, Shinshu University and Environmental Organic Chemistry, Kangwon National University
アメリカ合衆国 United States of America	ユタ大学 The University of Utah	平成8年3月27日 March 27, 1996	医学部との学部間協定（H2. 8. 6締結）を大学間協定に変更締結 Agreement between the Universities, changed over from that of faculties of the two Universities made in 1990
中華人民共和国 China	同済大学 Tongji University	平成8年5月1日 May 1, 1996	
インド India	インド工科大学マドラス校 Indian Institute of Technology, Madras	平成8年8月28日 August 28, 1996	
中華人民共和国 China	河北農業大学 Agricultural University of Hebei	平成8年9月1日 September 1, 1996	
中華人民共和国 China	河北医科大学 The Hebei Medical University	平成8年9月20日 September 20, 1996	河北医学院（S61.11.19締結）が河北医科大学に名称変更したことに伴う締結 Renewed agreement between Shinshu University and The Hebei Medicine University because of the change of the name of the latter
タイ国 Thailand	チェンマイ大学 Chiang Mai University	平成8年12月24日 December 24, 1996	
中華人民共和国 China	蘭州大学 Lanzhou University	平成9年9月8日 September 8, 1997	
中華人民共和国 China	蘇州大学 Suzhou University	平成9年11月4日 November 4, 1997	蘇州絲綢工学院（S61. 5.21締結）が蘇州大学に合併されたことに伴う締結 Renewed agreement between Shinshu University and Suzhou University because of the absorption of Suzhou Technology an Academy, with whom the agreement was made in 1986, into Suzhou University.
中華人民共和国 China	太原理工大学 Tai Yuan University of Science & Technology	平成10年4月15日 April 15, 1998	太原工業大学（H2.10.29締結）が山西鉱業学院を吸収合併し、太原理工大学に名称変更したことに伴う締結 Renewed agreement between Shinshu University and Tai Yuan University of Science & Technology because of the change of the name of the latter after the absorption of Sansei Mining an Academy into Tai Yan University of Technology, with whom the agreement was made in 1990.
英国 United Kingdom	エクセター大学 The University of Exeter	平成10年6月30日 June 30, 1998	
フランス France	ラ・ロッシュェル大学 The University of Ra Rochelle	平成10年9月2日 September 2, 1998	
オーストラリア Australia	カーティン工科大学 Curtin University of Technology	平成11年4月20日 April 20, 1999	
オーストラリア Australia	オーストラリア南極研究所 Australian Antarctic Division	平成11年8月6日 August 6, 1999	
ポーランド共和国 Poland	ピアリストーク大学 University of Bialystok	平成11年9月1日 September 1, 1999	
英国 United Kingdom	マンチェスター理工科大学 University of Manchester Institute of Science & Technology	平成11年9月10日 September 10, 1999	
中華人民共和国 China	東華大学 Dong Hua University	平成11年10月4日 October 4, 1999	
インドネシア共和国 Indonesia	プリタハラバン大学 Pelita Harapan University	平成12年1月31日 January 31, 2000	
タイ国 Thailand	カセサート大学 Kasetsart University	平成12年3月16日 March 16, 2000	
中華人民共和国 China	河南農業大学 Henan Agricultural University	平成12年3月23日 March 23, 2000	
大韓民国 Korea	尚志大学校 Sangji University	平成12年11月1日 November 1, 2000	
ポーランド共和国 Poland	シレジア工科大学 The Silesian Technical University	平成12年12月1日 December 1, 2000	
中華人民共和国 China	中国地質大学 China University of Geosciences	平成13年2月15日 February 15, 2001	
英国 United Kingdom	ケンブリッジ大学セント・エドモンド・コレッジ St Edmund's College, University of Cambridge	平成13年8月21日 August 21, 2001	
モンゴル国 Mongolia	モンゴル技術大学 Mongolia University of Technology	平成13年8月27日 August 27, 2001	
大韓民国 Korea	光云大学 Kwangwoon University	平成13年9月27日 September 27, 2001	

大韓民国 Korea	カトリック大学 Katholische University	平成13年10月29日 October 29, 2001	
ベルギー王国 Belgium	カトリック大学ルーヴァン Katholische University Leuvan	平成13年11月6日 November 6, 2001	
中華人民共和国 China	北京工業大学 Beijing Polytechnic University	平成14年6月17日 June 17, 2002	
ロシア Russian	カムチャツカ国立教育大学 Kamchatka State Teachers Training Institute	平成14年11月21日 November 21, 2002	
ドイツ Germany	ライプツィヒ大学 Leipzig University	平成14年12月17日 December 17, 2002	

学部間協定 Partnership Agreement Between Faculties

平成15. 5. 1現在
As of May 1, 2003

国名 Countries	大学名 Name of Foreign University or Institute	対応学部 Faculty of our University	締結年月日 Date of Agreement
タイ国 Thailand	チュラロンコン大学医学部 Faculty of Medicine, Chulalongkorn University	医学部 School of Medicine	平成2年9月17日 September 17, 1990
アメリカ合衆国 United States of America	ノースカロライナ州立大学繊維学部 College of Textile, North Carolina State University	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology	平成8年6月4日 June 4, 1996
中華人民共和国 China	北京大学国際関係学院 School of International Studies in Peking University	経済学部 Faculty of Economics	平成9年12月24日 December 24, 1997
中華人民共和国 China	北京大学経済学院 School of Economics of Peking University	経済学部 Faculty of Economics	平成10年2月9日 February 9, 1998
ドイツ Germany	マンハイム大学 Mannheim University	人文学部 Faculty of Arts	平成11年3月11日 March 11, 1999
中華人民共和国 China	香港理工大学応用科学及紡織学部 Faculty of Applied Science and Textiles The Hong Kong Polytechnic University	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology	平成11年10月4日 October 4, 1999
大韓民国 Korea	嶺南大学工学部 College of Engineering Yeungnam University	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology	平成12年9月7日 September 7, 2000
大韓民国 Korea	漢陽大学工学部 College of Engineering Hanyang University	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology	平成12年9月8日 September 8, 2000
タイ国 Thailand	シナコリンウィロート大学理学部 Faculty of Science, Srinakharinwirot University	理学部 Faculty of Science	平成12年11月20日 November 20, 2000
ドイツ Germany	マンハイム工科大学 Fachhochschule Mannheim, University of Applied Sciences	繊維学部 Faculty of Textile Science and Technology	平成13年4月18日 April 18, 2001
バングラデシュ Bangladesh	バングラデシュ農業大学 Bangladesh Agricultural University	農学部 Faculty of Agriculture	平成14年3月6日 March 6, 2002
モンゴル国 Mongolia	モンゴル国立農業大学 Mongolian State University of Agriculture	農学部 Faculty of Agriculture	平成14年9月1日 September 1, 2002

信州大学留学生センター教員業績一覧

年報第3号からの続きの業績です。年報第3号への追加および続きの業績が掲載されています。業績の種類は次のとおりです。①著書 ②論文・研究ノート ③翻訳 ④書評・随筆 ⑤学会・研究会報告 ⑥その他

金子 泰子

- ①2004「構想・構成の指導とその方法」『国語教育講座第4巻』共著 pp.13朝倉書店発刊準備中
- ②2003「日本語教育の現場から—プロジェクトワークの実際（途中経過報告）—」102-124中西一弘先生古稀記念論文集大阪国語教育研究会編；2004「日本語教育の現場から—プロジェクトワークの実際（完結編）—」『ことばと文化』長野・言語文化研究会編
- ⑤2003「日本語教育の現場から—プロジェクトワークの実際—」長野・言語文化研究会

合津 美穂

- ②2003「留学生における非標準語との接触・使用・学習意識—信州大学工学部留学生5名のケーススタディ—」『信州大学留学生センター紀要第4号』39-55；2003「三川町方言話者における方言と標準語の使い分け—「道教え談話」の分析を通じて—」『日本語研究第23号』東京都立大学国語学研究室31-46

佐藤 友則

- ②2004「ポーズと長さが音声評価に与える影響力の比較」『信州大学留学生センター紀要第5号』59-68；2004阿部敏子・佐藤佳子と共著「長野県内の日本語ボランティアに関する調査」『信州大学留学生センター紀要第5号』69-81

高石久美子

- ①2003『かんじ だいすき（四）～日本語をまなぶ世界の子どものために～』共著 社団法人国際日本語普及協会；2004『かんじ だいすき（一）漢字カード・絵カード～日本語をまなぶ世界の子どものために～』共著 社団法人国際日本語普及協会；2004『かんじ だいすき（二）漢字カード・絵カード～日本語をまなぶ世界の子どものために～』共著 社団法人国際日本語普及協会；2004『かんじ だいすき（三）漢字カード・絵カード～日本語をまなぶ世界の子どものために～』共著 社団法人国際日本語普及協会；2004『かんじ だいすき（四）漢字カード・絵カード～日本語をまなぶ世界の子どものために～』共著 社団法人国際日本語普及協会

中村 純子

- ②2003「上伊那方言、推量助動詞、一ダラの終助詞化現象—壮年層を中心として」『信州大学留学生センター紀要第4号』15-26信州大学留学生センター；
- 2004「補足的内容を伴う連用形接続—農学系論文を対象として—」『信州大学留学生センター紀要第5号』1-12信州大学留学生センター

村田 明

- ②2003「留学生の日本語作文に見られる謝り—単一文の場合—」『信州大学留学生センター紀要第4号』57-68 信州大学留学生センター；2004「よる、とる、つく、おく、する」『信州大学留学生センター紀要第5号』13-18 信州大学留学生センター
- ④2004 Representation Theory E. Williams 2003 MIT Press 『IVY』名古屋大学英文学会

留学生センター年報をやっとお届けできました。第3号までは、10月から翌年の9月までを扱うという変則的なものでしたので、今回から学年歴に合せようと、途中で編集方針を変更したため、発行が遅れました。編集者の怠慢もあってのことなのでお詫びいたします。ということで、第4号は、2002年9月から2004年3月までの1年半をカバーしています。今後は、4月から翌年3月までの1年間の年報になります。

さて、国立大学法人制度発足初年度、運営費交付金の削減圧力と、各種の「競争的資金」によるアイデア競争の圧力が、目に見えて強まっているようです。アイデア競争が悪いとは言いませんが、底の浅いうわついた競争になることを恐れます。留学生政策も含めた大学の国際性を考える時も、無定見で格好だけの国際交流が多いことに気がきます。着実に息の長い連携と協力こそ必要です。それにしてもなんとなく気ぜわしく感じるのは私だけでしょうか。2005年が皆様にとって、良い年でありますように。

(編集担当：高石道明)

信州大学留学生センター年報 第4号

編集担当者 高石道明

平成16年4月 発行

発行所 信州大学留学生センター

〒390-8621 松本市旭3-1-1

TEL (0263) 37-2185

FAX (0263) 37-2181

<http://isc.shinshu-u.ac.jp>